
先に生きている

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先に生きている

【Zマーク】

Z0935Q

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

本当に日常の小学校を描いたお話
毎日を必死に過ごす姿は聖職者などではなく、普通の人間でしかない。

子どもも大人もぜひ読んでほしい。こんなちっぽけな毎日を過ごしている人間が「先生」と呼ばれているのだと。

4月某日

「ねえねえ、ちょっとと聞いてよ。うちの下の子の1年生の担任、あの島中先生になつたらしいよ。超ハズレだわ。」

「えー！島中つてあるおばさん？残念ね~」

「ほんとよ、去年2年生だつたから、ちょっとと覚悟してたのよね。だいたい、2年生の担任が1年生の担任になるじゃない。あの人、なんだかだらしないし、ヒステリックに叫んだりするから、幸子ちゃんなんかは、気持ち悪いって言つてているのよ」

「2年生に気持ち悪いって言われるよつじやね…小さい子に嫌われるつてよっぽどのことじやない」

「うちの5年生は、新しく来た金子先生らしいわ」

「あ、あのメガネ？なんか調子こいてる感じする人でしょ？」

「なんだか雰囲気変わつた人よね。でつかい黒縁メガネで初めはみんな怖がつて様子をうかがつてたみたいだけど、けつこう面白い人でもあるみたいね」

「実はまだ二〇代だつてさ、見えなくない？」

「え？本当？もつと上かと思ってた。34・5だと思ってたわ。それくらいでも不思議じやないよね」

「落ち着きがあるつてことなんじやないかしら？」

「私は三年生担任の柳先生が良かつたな」

「えー、柳先生、俺、かつこういいオーラ出してるナルシストっぽくて気持ち悪くない？」

「でも、顔はまあまあかっこいいけどね」

「早見先生はかわいいんじやない？若くてバリバリのサッカー少年つて感じ。あーゆー感じつて、子どもと年齢層近いからいいんじやない？うちの子も、好きだつて言つてたわよ」

「あれは、かわいいんじゃなくて、ガキなだけよ。先生には全然見えないわよ。4年生のお母さん方に聞いたら、けつこうひどいって話よ」

「佐藤先生もガツガツしてて、ちょっと付き合いでくそうだしね」「佐藤先生と柳先生つて付き合ってるんでしょ？」

「え、それ初耳」

「なんか、こないだPTAの関係で柳先生と話をしたんだけど、後ろで佐藤先生じつとこっち睨んできたのよ。狙つてないって！佐藤先生に言いたかつたくらい」

「えー、なんか意外だつたなあ。佐藤先生つて、もっと硬い感じの人が好きだと思つてた」

「先生だからさ、世間知らずで先生っぽくない人に惹かれるのよ」「そう考えると、この学校の先生つてろくなのいないわね。大体、ちょっと若すぎなのよね」

「勘弁してほしいわね。うちの子、勉強できないし…ちゃんと教えてくれなさそうだから、塾とか入れようかしら？」

「やっぱり、6年生は岡部先生は安心よね」

「うーん、ちょっと暑苦しいといふあるけど、子ども達も信頼してるみたいだし」

「やっぱりあれくらいの年代の男の先生に持つてもらいたいわよね」

「校長に担任変えてくれ！つて言つたら変わるかしら？」

「校長じゃダメだめ、教育委員会に直接電話したらいいのよ。

「教育委員会に電話するつてモンスター・ペアレントっぽくない？」

「全然、今、けつこう電話する人多いのよ。うちの旦那の友達が教育委員の人らしくて。教育委員会から、各学校の校長に指示が出たりするから、結局校長先生つて言つても支店長みたいなもので、権限はそんなにないつて言つてたらしいわよ」

「そりなんだ。私、校長先生つてすつじい偉いもんだと思ってた」

「「こないだ、テレビで見たんだけど、まづ匿名の電話を教育委員会に入れるらしいのよ」

「それで？」

「匿名で、何年の担任を変えてくれって言つたりしないのよ。配慮もないし、子ども達からの信頼もないって言つたの。その後で、しつかりと名前を出して、変えてくれって頼みなおすのよ」

「名前出したら、めんどくさいことになるんじゃない？」

「そこは、名前を出さないで下さい、とか言えば、個人情報保護だとかなんとかで、どうともなるらしいわ。その時に、私一人の意見じゃなくて、みんな言つてますよ！って言つのがポイントらしいわ」

「なんか嘘くさくない？」

「いいのよ。とつあえずそういう話が出たら、教育委員会から校長に話が出て、その先生に注意が行くらしいの。それで、結局やめて新しい人がくるってことも多いらしいわ」

「あ、去年になくなつた高橋先生つてそういう感じ？高橋先生、うちの学校まだ4年くらいしかいなかつたわよ」

「らしいわよ。なんか、田辺さん達、すつごい高橋先生嫌がつてたもんね。飲み会に来ても、高橋先生つてお酒飲まないでウーロン茶らしくて、酔つぱらつた田辺さんが、『お前男だろー』つてガンガン文句言つてたらしいわ。本人にはもちろん、校長とかにもせんざん話してたみたいよ」

「えー、そんなことで担任つて変えることつてできるのかしら？私もやってみようかしら？畠中先生はちょっと勘弁だわ」

「じゃあ、とりあえず匿名メールでも送つてみる？」

「フリーのアドレスとれば、バレないんじゃない？私、その辺わからから、ちょっとやってみようかしら？」

「結局、子どもの為よね。あの先生じゃ、うちの子かわいそうよ」

「あ、もうこんな時間！武が帰つてくるわ」

「じゃあ、そろそろ今日はお開きにしましょつか。今日のお菓子代、
一人三百円ね」
「はーい」

「これ、すみません」

島中良子が言いながら、教頭に封筒を出しているのを見てしまった。封筒には「辞表」と大きく書いてある。辞表を出す人を初めて見たなあと、間の抜けたことをぼんやりと思った。

朝も早い七時前、職員室は俺と教頭、そして一年生の担任の島中先生しかいない。小学校の出勤は八時までにすれば良いことになっているので、七時前には職員室はまだ人がいない。

島中先生はいつも八時ギリギリに出勤していくので、駐車場の車を見たとき、めずらしいこともあるものだと思った。俺はいつも七時前に来て仕事を始める。朝の職員室は教頭と一人きり、会話がないわけではないが、放課後の職員室に比べれば仕事ははかどる。そんな時間の有効な使い方が好きだった。

そんないつもの朝のはずだったのだが…クラスがうまくいっていないのは、一目瞭然だったけど、まさか辞表を出すまで追い込まれているとは…こんな修羅場に巻き込まれるくらいなら、もう少し遅く來るのだった。

「いや、こんなのは出してほしいとは一言も言つてないんだけど」「昨日の面談で話していたことは、こういうことですよね。もういいんです。年度の途中でやめるのは心苦しいけど、どうせ私なんかは教師を辞めたほうがいいってことはわかつてます」

声を荒げて、島中先生は言つた。アラフォーとは名ばかりで、45を超えているはず。四捨五入したらアラフィフなはずだったと思う。

「おはようございまーす」

深刻さを感じ取つてそつと職員室から抜け出るか、気づかないふりをするかの2択で後者を選んだ俺は、頭の悪そうな大きな声を出した。

「おはようございます」

畠中先生はこちらも見ないで言った。声に力はなく、涙声だつたりするから心が痛い。

「ここじゃ、あれなんで、ちょっと校長室へ」

挨拶もしないで、浜田孝教頭は畠中先生を連れて校長室へ入つていった。浜田教頭は、40代前半で教頭になり、教頭としてうちの学校で3校目になる。管理職というのは、たいてい2年か3年ほどで学校を変わる。校長採用試験も受かっているとの噂が立つてあり、校長の椅子の空きが出るのを待つてているらしい。校長待ちの時に、辞職者を出した、とでもなれば体裁が悪いのもよくわかる。浜田教頭は、苦虫をガリガリを噛んだらそうなるかも知れないな、という顔をしていた。

畠中先生と浜田教頭が校長室に入つたところで、俺は机のノートパソコンを開いた。今年度各小学校教諭に全員分支給されたものだ。最新のOSは入っているもの、中身は貧相なスペックしかない。今時、DVDも焼けない、CDも焼けない。ネットにはつながるもの、サーバーは町の教育委員会の所有なので、規制のかかっているサイトがほとんどである。公の人間のやることはどこか抜けている。俺も含めてなのかもしれないけど。

教師になつて5年目、初任で3年生の担任になつてから、3、4年生、1、2年生の4年間を前任校で過ごした。この学校に勤務し、5年生の担任として4か月を過ごした。

初めての高学年、初めてこの学校に足を踏み入れたその日に、「5年生、頼みますよ。若さを生かしてバリバリやってくださいね」と浜田教頭に言われた時には胸が躍つた。小学校において、高学年は花形だと思っている。高学年がすごいということは、その学校がすごいということになる。五年を持つということは、六年生も持たされることが多いので、卒業担任を持たれるということにもつながる。卒業生を出す、教師になった時からの憧れだった。

我が北星小学校は、北海道の片田舎にある学年一クラスの小さな

学校だ。一年生から六年生まで一クラスずつ、それと六年生には情緒障害の児童がいる「すこやか学級」と名付けられたクラスもある。「特別支援学級」と呼ばれ、通常は六年生のクラスと一緒に行動するが、体育、音楽、家庭科、図工などの実技教科は先生とマンツーマンで学習をする。まさに「すこやか」に生活のできるクラスだ。

これには正直頭が来る。三〇人弱の子ども達を受け持つ俺たち普通学級の担任に対し、すこやか学級の先生は見るのは一人だけ。それだけ、特別な配慮の必要な子、ということなのはわかるが、三〇人の子どもを相手にするのと1人を相手にするのでは、大変さが違うのは一目瞭然だと思う。そして、何より頭に来るのが、特別支援学級の担任は給料が高い。特別支援手当、というものが出て、給料の八%。子どもが特別だからって、教師まで特別にしなくてもよからうに。

それに、教務と呼ばれる担任団の統括をする職員室における「学級委員」のような役職もある。これは、担任がスムーズに仕事ができるよう様々な雑用のような仕事をする。具体的には、担任の様々な事務作業の補佐・チェック、担任不在の際の補欠、各担任への指導など、いなくても学校は回るかも知れないが、いなくなられると困るポジションである。このポジションは教頭へステップアップするためのものもあるので、各学校のミドルエイジがなることが多い。事実、我が校の教務も四十代初めの男の先生が務めている。保健室の養護教諭、職員室の事務の先生（教職員免許を持たないので、役場の人間と同じような立場となる。業務は各種教材の発注・管理、給料や旅費などの管理などがある）が加わり、それをまとめ上げる職員室の「教師」の役割となる教頭がいる。

そして、学校全体の全責任を負う校長がいて、小学校は成り立っている。学校に勤務してわかつたことだが、学校全体を動かすのは教頭だということ。だから、漫画などでは教頭はピリピリしていて、校長はニコニコしているのだ。校長は学校全体の計画を立て、どんと構えている。実務は教頭がするのだから当然である。そんなこと

も、勤務するまでわからなかつた。いや、勤務して数年はわからなかつた。

勤務して5年、少しづつ学校のことが見えてきた。立ち上がつたパソコンを操作して、ワープロソフトを起動させる。今日、出さなくてはいけない学級通信を印刷するためだつた。

学級通信というのは、「出さなければならぬもの」であるということを知つたのも、教師になつてからだつた。自分が子どもの頃は毎日のように学級通信を受け取つていた気がする。先生の手書きの下手くそなイラストと共に、「今日の明彦の発表は素晴らしかつた!」とか「昨日の学習発表会の練習での武司の態度はひどかつた!」などと書かれていた。今なら個人情報満載で日の目を見ないだろ。こんなこと、うちのクラスにいる人間ならみんな知つている、わざわざプリントにする必要はないだろに…と子ども心に不思議に思つたものだつた。そして、ほとんどは紙飛行機になつっていたのも事実だ。当時の学級通信とは、担任の自己満足のためのもの、というイメージがあつた。出さなくて(・・・・・)も(・)い(・)い(・)もの(・・・)だつた(・・・)。

その点、今の学級通信は毎週必ず出さなければならぬ。なぜか?それは、時間割が毎週同じではないからだ。一年間の授業時数が変わり、なんと毎週同じ時間割ではその授業時数をクリアできないからだ。「ナナメ掛け」と呼ばれ、月曜日の3時間目は、今週は社会、来週は音楽、というように流動的になつてしまつた。とんでもない話である。おかげで、忘れ物率は飛躍的にUPした。当たり前だろ。俺が子どもの頃なんて、時間割を見た記憶はない。

俺のクラスの学級通信「上を向いて歩こう」の表面には教室でつた出来事を無記名で書く。無記名というのがポイントだ。前に、記名して子どものいいことを褒めていたり、「どうしてうちの子の名前が出ないんですか?ひいきじやありませんか?」と、電話をもらつた。もちろん、ひいきではなく、うちの子である翔太、が良いことをほほ、全くしなかつたからだつた。次の日、隣

の子の消しゴムを無理やり拾わせて、「優しい翔太君、消しゴムを拾つ」と書いたら、個人懇談で、

「あんな厭味つたらしいことを載せなくともいいんじゃないですか

？」

と怒られた。幸い、それ以来苦情はなかつたが、どうしろつていうんだ！と叫びたくなつて、その夜にいつも飲まないビールを立て続けにあおつたことを覚えている。

昨日あつた出来事を書く。給食をこぼしたこと、みんなで片づけたことを、サラサラと書いていく。さも、素敵な事だつたように書くことも得意になつてきた。裏面には、来週の時間割を書き入れる。ふと、時計を見る。七時半を回つていた。その間に、同僚たちも少しずつ出勤をする。顔をあげずに、おはよづけいまーす！と声を上げる。大きな声で挨拶、子どもにも話していることは実践しているつもりだつた。

「金子さん、こないだの生活の実態アンケートの集計いつだつけ？」
「あ、おはよづけぞいます。あれは、確かに今週中だつたと思うよ」「うえ、今週中…まずいなあー、やる暇ないなあ…」「了解。わかりました」

と声をかけてきたのは、隣の席の4年生担任、早見光教諭だつた。サッカー場に今から立つのですか？という格好で職員室に現れる。俺よりも三つほど若い男で、バリバリのサッカー大好きな男。うちの学校のサッカー少年団を受け持つている。

「早いうちにやつておいた方がいいよ。教頭、なんか機嫌悪そうだったから」「う

「いや、わかつてはいるんすけどね。今週末、うちのサッカー大会があるから、そんなのやつてる暇はないんすよね。めんどくさいなあ」

「めんどくさがるなよ。サッカーは仕事じゃないだろ？」「ま、そうですね。俺の好きでやつてのことだから」「う

と早見は面倒くさそうに言つなり、机にあつたヘアワックスを持つ

と職員室を出て行つた。自分の家でしてこいよーと怒鳴りつけたくもなるのを抑える。たぶん、トイレで髪の毛をセットしてくるのだろう。

早見は、サッカー少年団を受け持つてゐる。放課後に子どもを集めてサッカーを教えるのだが、小学校には部活がない。なので、完全なボランティアということになる。お金ももらわないでサッカーを教える、聞こえはいいがその分本務に支障をきたすこともある。サッカーの練習は毎日、土日も欠かさず練習を行う。一生懸命といえば一生懸命だが。

「本来の仕事に一生懸命になれよー！」

と何度も酒の席で説教したこともあるが、本人は全く応えない。念佛を唱えているわけではないが、馬の方が少しは覚えてくれるんじゃないか?と思うほどだ。

学級通信を印刷して、教室に向かう。時間は八時十五分前。八時十五分までに児童は登校を終えなくてはならないので、パラパラと玄関に子ども達が集まつてゐた。

「おはようございます」

「あ、金子先生おはようございます」

子ども相手とは言え、丁寧な言葉を使うようにしてゐる。丁寧な言葉づかいを子どもに求めるなら、自分が丁寧な言葉遣いをしてやればよい。「おはよー」とフランクに声をかければ、「おはよー」と返つてくるのは当たり前だ。

自分の教室に行くと、子どもの姿はまだなかつた。自分のクラスの子ども達の大体の登校時間は把握している。一番早く来るのは、児島蓮太で八時五分くらいに来る。

誰もいない教室で、頬をパンパンと打つ。そして、「ヨツシャ」と氣合を入れる。この学校に来てから毎朝やつてゐる儀式のようなものだつた。毎日が戦いのようなものである。そして、俺は毎日に戦いに勝利している。保護者からのクレームもなければ、子ども達も俺に慕つてゐるのがわかる。そう、俺は「できる教師」なのだ。

ピンポンパンポン

「金子先生、金子先生、お電話が入っています。職員室までお戻りください」

その放送はいつもと変わらない放送だったのだが、なんとなく俺は嫌なものを感じた。子供も達に文句を言われないよう、早足で廊下を進んで職員室に入る。

後に考えると、その電話が始まってしまったよつとも思つ。その電話が順風満帆だった毎日の生活にヒビを入れるものであり、一度ヒビが入つた毎日は案外もろいものでガラガラと崩れしていく。そんなことすらわからなかつた俺は、やはり未熟だったのだと思つ。『できる教師』なんて、この世に存在しないことに気がつくのは、この時よりもつともつと後のことである。

「おはようございます。お電話変わつました、金子です。こつもお世話になつておつまわ」

「おはようございます。柏木です」

「どうぞおました?」

「こや、どうもいつもなにこんですナガ」

「はあ」

「うちの雅彦がね、学校行きたくなつて言つてるんですね」

「えー本当ですか? 雅彦さんが...」

「なんか、今日なんかは、ちよつと鼻もぐずぐずしてて、から、様子を見るために休ませよつかと思つてて言つてこるんですか?」

「なんで雅彦さんは学校に行きたくないつて言つてこるんですか?」「みんなが僕の言つことを聞いてくれないつて言つてて言つてて、誰もわかつてくれないんだつて。もしかして、つかのやう、いじめられているんぢやないですか?」

「いや、いじめられているといつよつは...なんといつか、イマイチ話がみんなと会わないとこりもありますよね」

「だから、それがみんなからはずすわれてこるつてことじやないんですか?」

「はずせれでこるつてことのとも、またおふつと違つと黙つたのですが...」

「雅彦が話しかけても、周りのみんなはちやんと話聞いてくれないで、僕はいつも一人ぼっちなんだつて。休み時間とかも、僕がドッジボールが苦手なのわかつててドッジボールやりひ、とか言つて言つてているんですけど」

「それは、みんなそれやりたい遊びもありますし」

「とりあえず金子先生から見て、いじめられていらないんですね?」

「こや、ないと自分では思つてているのですが...」

「どうちなんですか？自分のクラスなんだからわかるはずじゃないですか？」

「ないと、思います」

「絶対ですね。これで調べていじめがあつたら、校長に言つだけじやすみませんからね」

「話は子ども達に聞いてみますから。特に誰とつまへいかないって、雅彦さんは言つているんですか？」

「誰つてこともあります。みんなつて言つてます。みんな「みんなつて言われましても…クラスみんながいじめをしてつて言つてつるんですか？」

「だからやつだつて言つてつるじやないですか…もうついいです。とりあえず、今日は様子見ます」

「あ、放課後、また時間がある時お電話してもいいですか？」

「はい。それでは」

ガチャーン、ツーツー

受話器を戻しながら、とうとう来たか…と胸が苦しくなつた。電話中は頭の中が真つ白で、深く考へることができなかつた。もうちよつとどうにかできなかつただろうか？少なくともこつういう状態で電話を切ることにならない対応はなかつただろうか…？

ふらふらした状態で自分の椅子に座る。雅彦か…確かに言つていることは思い当たる。雅彦の話は五年生にしてはポケモンの話題ばかりで、周囲には受け入れられていない。そして、舌つたらずな話し方で語彙も少ない。仲間外れ、とは言わないが、みんなそれぞれ少し距離を置いてつるのは事実だ。それをピンポイントで指摘されては返答に困る。

その時、教頭と畠中が校長室から出でてくるとこりが見えた。

基本は「ほうれんそつ」の「報告・連絡・相談」だ。しかし、自分で解決して何事もないように振る舞つという選択肢もあるか…自分の中の都合のいい考えが誘惑をしてくるが、正直に話した方が被

害が少ないことも経験からわかっていた。どうする…？

迷つたが、今すぐ報告するのはタイミングが悪すぎる。畠中先生の辞表話の後、期待していた若手教師からいじめの相談なんてされたら、ただでさえ薄い髪がハラハラと落ちて行ってしまうだろう。胃も悪いと聞いていい。今は話すべきではない、そう決断した。

決断すると、気が楽になつた。都合が悪くなる前に教室に避難することにしよう。教室で子どもの対応をしていた、という話にすれば、何かあつた時も対応できるだろう。

自分の身を守る術は、この五年間で学んだつもりだ。今回も乗り切れるとは思う。大丈夫だ。

教室に向かう時、畠中先生の方をチラつと見た。女の子が教室でケンカが起きていると言つてはいる。教頭の顔が曇るのが見えた。当分報告するのは遅くなりそうだ。

校長室を出ると、金子先生が青ざめた顔をして受話器を握つてゐるのが見えた。あれは多分クレームだらう。なんとなくわかる。私もよく来る電話だから。

校長室での話には参つた。辞表を出していのと、どうしてやめさせてくれないのだろう? ここは民主主義国家ではないのだろうか? 教育公務員は全体の奉仕者であり、私自身の幸せや心の平穏はもうえない、ということだろうか?

浜田教頭の話もよくわからぬ。昨日あれだけ、「畠中先生の学級経営は経営になつてないんだよ」

「子どもの身の回りや生活習慣は担任の生活習慣の鏡なんだ。だから、子どもに言つ前に畠中先生の机をちゃんと片づけないと」

「指示を徹底してください。良い姿勢を取らせるなら、確實に全員取らせないと! 一年生なんて、学習習慣を身に着けさせるのが大前提」

とかなんとかネチネチ私をいじめておいて。あんなの私が嫌いだから、この学校から追い出したいに決まつてゐる。私は言われなくともちゃんとやつている。ちゃんとやつてくれないのは、今年の一年生の質が悪いから。前の一年生は、今と同じようにやつてもちゃんと動いてくれた。だから、私の学級経営は間違つていない。子どもが悪いと思う。

そして何より親が悪いと思つ。ちよつとのケンカですぐ「学校に電話が来る。

「畠中先生、どうしてうちの子が悪くないのに、うちの子が謝らなきやならないんですか! うちの子が言つてましたよ。健太君から何もしていないのに殴つてきたって! そりや、うちの子もやり返したかもしれないけど、始まりは健太君ならうの子は被害者です。もうちよつとちゃんと指導してくれなきや困ります」

「ちょっと、うちの子繰り上がりの足し算ちゃんとできないんですね。けど。宿題とかもうちょっと出してもらつてもいいですか?このままだつたらこの先不安です。学校で何を教えてるんですか?」

なんて電話は日常茶飯事だし、私も、

「申し訳ありません」

とは言つけど、本心から言つていい訳ではない。だつて、私の指導とこうよつは、そういう電話をかけてくる家庭の指導が悪いからそうなるのだから。ちゃんとやつてている子は、私の指導についてくるし、家庭からの文句もない。人のせいにするからなんでもかんでもできなくなると思う。私の学級経営は悪くない。悪いのは、子どもであつて、親だと思つ。

職員室の席に戻つてPCを立ち上げる。壁紙は韓国の人気スター、パク・チヨビンだ。子どもの相手なんかしているより、チヨビンの顔を見ている方がよっぽど心は休まる。

「畠中せんせー、けんた君とかい君がまたケンカしてると見ると、横にクラスの女の子のレミが来ていた。ちょっと怒つた顔をしている。それも私のせいだつていうの?」

「わかつたわよ。今行くから待つてなさい」

今日もまた楽しくもない一日が始まる。早く帰つて、「春のオペレッタ」のドラマのDVD見たいわ。チヨビンに早く会いたい。

学校の先生なんて、やつてられない仕事だと思う。そのやつてられない仕事なんて辞めたい。辞めて何があるのかなんてわからないし、不安ばかりだけ。

仕事を辞めたいのかな?それともこの人生から降りたいのかな?わからなくなつてくる。

「せんせー、早く行かなくちゃ!」

とレミが引つ張る。よれてくたくなつたTシャツが伸びるが、構いやしない。どうせ、学校と家の往復しかないのだから。恋人と呼べる男どころか、声をかけられたことすらない。生涯処女を貫き通すことにもなるだろつ。不本意ながら。

とてとてと、先を歩く「ル」の後姿につけていく。「ル」とカタカナでつけられた名前に負けない子に育つていいくのだろうか？私のように「良こそ」という名前を付けられ、「ビルでもよこ」になってしまつのだらうか？

それは、私の指導ビルではないだらうな、となるとなく思いながら廊下を走つた。

早見 光の話

畠中がバタバタと職員室から出て行った。五〇近くなってバタバタ廊下を走るなよ。見苦しいな。

畠中は悪いけど人間として終わつてると思つ。ボサボサの髪の毛は頭頂部がもう薄くなつてゐるし、体も鏡餅みたいになつてゐる。その上、ピチピチしたよれたTシャツを着てゐるのだから、目のやり場に困る。人生をあきらめぢやつてゐんのだろうなあ、とかわいそうにも思うが、逆に何で直さないんだろう?と不思議にも思う。

時計を見ると後十分ほどで職員朝会が始まる。一日の朝の会はクラスの中だけではない。学校の先生方の中でも同じように行われる。少しでも1時間目の国語の時間に困らないように教科書を眺めることにした。

授業の準備はしたいしたい!とは思つてゐるが、正直準備をする時間はない。なんてことはない、毎日放課後にサッカー少年団の指導があるからだ。

俺の四年生は毎日六時間授業なので、三時半過ぎに下校になる。その後、学校のグラウンドでサッカーをやりたい子ども達を集め、夜は暗くなるまで練習を行つ。今は夏真つ盛りなので七時半過ぎまで練習ができる。そうすると、職員室に戻つてくるのは八時頃。八時半には教頭が学校を閉めるので、自然と次の日の授業の準備なんてする時間なんてなくなる。家に帰れば飯を食つて寝るだけの日々だつた。

この少年団というのは、はつきり言つてよくわからないシステムだ。地域の少年団なので先生がやらなきやならないことはないのだが、俺は間違いなくサッカーの指導をするためにこの学校に配属された。小中高大とサッカーをやってきた俺は、採用試験の面接の時に、

「今までやつてきたサッカーを生かし、教えることで、これから

時代を担う子ども達にグローバルな視点を「えたいと思つて」います！サッカーは声なき「ミニアーチェーションツール」です。世界で一番競技人口が多いと呼ばれるサッカーは、たとえ言葉が通用しなくても世界の人々と繋がろう！という気持ちを養つてくれます。だからこそ、私はサッカーの指導を学校教育の中で生かしたいのです！」

などといったものだから、このようなサッカーの盛んな少年団のある学校に勤務することになった、

この少年団、完全なボランティアで土日も休まず練習をするにも関わらず、給料は出ない。その上、下手なことをすると容赦なく保護者達からクレームが来る。この間なんか、体格の大きい子をキーパーに起用したら、

「先生、うちの子が太つていているからつてキーパーにするのやめてください！」

と電話が来て困つてしまつた。たぶん、FWにして試合に出さなきや出さないでまた電話が来るのだろう。どうすればいいのかわかつたもんじやない。

でも、俺は少年団の指導に文句はない。それで教員採用試験を受からせてもらつたことは一目瞭然だから。サッカーに携わつているのは楽しいと思うし、何より勉強なんかよりサッカーの方が楽しいに決まつていて。そういうのは俺だけじゃなく、子どももそういう決まつてているはずだ。

八時二十分になつて、職員室にバタバタと先生方が戻つてくる。今日の日直は2年生担任の佐藤真理先生だ。ショートカットが似合うが、ガツガツしすぎていて俺は苦手だ。

「それでは、八月二十九日木曜日、職員朝会を始めます。みなさんおはようございます！」

おはようございます、とボソボソとつぶやく。あほくや。

「今日の日程は板書の通りとなつております。板書事項に関して、何がありますでしょうか？」はい、岡部先生」

「はい、今日は札幌の方で国語の研修会に出席してきます。六年生

の補欠には林先生が入つてくださいます。何かと迷惑をおかけしますが、よろしくお願ひします」

六年生の担任、岡部博文先生が話した。40代半ばのミドルエイジとこうポジションについている先生だ。俺も含めてみんな頭が上がりない。岡部先生の言つことは校長の言つ言葉よりも説得力があり、絶対だつた。

「他にありますか？なければ、校長からの一言です」と佐藤先生が松永校長に話を振ると、眠たそうな目を光らせて話し始めた。

「えー、夏休みが終わり、子ども達も少しづつ学校のペースに慣れてくれました。でも、ここからが正念場です。それぞれの先生方、頼みましたよ」

と言つと、また目を細めてしまった。松永校長のイメージはキツネだった。普段から眠そうな目をしてこいつの油断を誘つておいて、一気にのど元にどびかかつてくる。口元は笑つても目は笑つていいことも多い。おつかない人だつた。

「それでは、職員朝会終わります。今日も一日、よろしくお願ひします」

お願ひします！とみんなが言つて職員朝会は終わつた。なんで黒板に書いていることを読み上げて、それに対してもう一つに発言しなきやならないんだか…子どもと同じかよ！と腹立たしく思う。

学校の先生になつて二年目、去年から「先生」という職業に嫌悪感すら持つようになつた。飯を食べに行つて職業を聞かれた時には、「公務員です」と名乗るようにしているのも、「先生」という言葉の響きが気に食わないからだ。先に生まれているから偉い！と思つている人間の多いこと多いこと。俺はそうなりたくないと常日頃から思つてゐる。

朝会が終わると、みんなそれぞれ教室に向かう。俺にとつて至福の時間がやつてくる。職員室で同僚と顔を突き合わせているより、子どもとじやれていた方が楽しい。そもそも、子どもが好きだから

この仕事についたのだ。なぜ、教室に向かう教師の顔はみんな曇っているのか不思議でしうがない。

もちろん嫌いな子どももいるが、そういう奴は無視しどけばいいのだ。親はうるさいが、クレームが来ても死ぬわけではないし。そもそも、俺が悪いというよりは、クレームをしてくる子どもの方が圧倒的に悪いことが多い。気にすることはない。

さて、今日も一日楽しんでいい。

一時間目の授業の終わりのチャイムが鳴った。これから二十分間の中休みが始まる。子ども達は一斉に廊下に駆け出していく。グラウンドのサッカーゴールを取るのに毎日熱中しているのだ。いつもなら俺も一緒に混ざつて遊ぶところだけど、今日はそうはいかない。柏木は体調が悪いので今日は欠席、という話を朝して事なきを得たが、今日のプリントなどを他の児童に持つて行つてもらわなくてはならない。その人選も考えなくては。

しかし、何よりもまず、今朝の電話の一件を管理職に報告しなくてはならない。こういう問題は熱いうちに叩くのが鉄則だと思つてゐる。時間が経てば経つほどこじれるのは、同僚を見てきて学んできているつもりだ。また、正直に話した方がチームで対処できる。個人に責任がふつかれされることも少ない。その為の管理職なのだ。利用しない手はない。

しかし、柏木がいじめられている、という認識は俺自身なかつた。確かに少し浮いてゐる、という感覚はあつたが、それをいじめとは認識していなかつた。今の時代のいじめの定義は文科省からしっかりと打ち出されている。文科省では、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」とある。これは要約すると、「私はいじめられている」と言えば、それは「いじめ」となるということだ。だから、今回の柏木のケースも定義から言うと、「いじめ」となる。

この定義では、「いじめる奴が悪い」となるが、いじめていた側もこの報告を受けて、「いじめていないのに、いじめていると言つて、いじめられた」と言えばそれは「いじめ」となる。こうなつたら水掛け論だ。言つたもの勝ちの世界である。それを国が打ち出しているのだから、とんでもない話だ。

職員室に戻ると、教頭は眉間にしわを寄せてパソコンとにらめっこしていた。老眼が入つてきているのか、画面に近づかないと字が見えないらしい。教頭の事務仕事の量は膨大だ。休み時間と言え、休憩時間ではないのだ。

「あの、教頭先生…」

「なんですか？金子先生」

うーん、確実に機嫌は悪そうだ。しかし、もつこれ以上引き延ばすことはできない。

「ええと、ですね…少し相談が…」

「…はい、なんでしょう？」

教頭の眉間にしわが深くなつたような気がした。

「ええと、今朝、うちのクラスの柏木さんから電話がありまして…」

「柏木…えつと、今日は体調が悪くて欠席している子ですよね。何がありましたか？」

欠席児童は黒板で一目でわかるようになつていて。体調不良、と書いていたのだった。

「実は、体調不良という訳ではなく…お母さんから電話があつて、『いじめられているから、学校に行きたくない』という話があつたんですね…」

話している最中から顔を見ることができなかつた。仕方がないので眉間に辺りを見ていたが、話しあつた段階で頭皮がみるみる赤くなつていくのがわかつた。怒ると人間つて、赤くなるんだな…とぼんやり思つた。いや、思つてしまつた。

「金子先生、どうしてそういうことは朝から言わないんだ…すぐに報告するべきだろう！」

「いえ、子ども達の対応に追われて…授業も始まつてしまつたものですから、報告が遅れてしまつました」

「言い訳するなつ！」

つばしづきが顔にかかる。仕方がない、ここは甘んじて受けなくてはならない時だ。職員室にいた同僚の動きが一瞬止まって、腫物

には触らないように動き出す。自分で何とかするしかない。

「すいませんでした。教頭先生、どのように対応していったらいいでしょうか?」

「どのように対応したらいいでしょうか?ではなくて、どのように対応するべきか考えろ!」

しまった。言葉を間違えた。「失敗したときは、改善策を用意してから報告しろ」という教えを守らなかつた。すぐに、言葉を選んで話すことにある。

「今朝の柏木さんの話では、雅彦さんは学校でいじめられているから学校に行きたくない、と言つて居るやうです。具体的には、自分のしたい遊びをやつてもらえないという感じの事を言つていました。確かに少し周囲となじんでいないところはあります。しかし、私自身としてはそれをいじめと認識していませんでした。なので、今日の授業が終わつたらすぐに本人と話して、事情を聴いてみようと思つています。繰り返しますが、周囲の児童が目立つていじめているという様子は、私の見て居るところではありませんでした。放課後の様子などはわかりませんが、そのような話を聞いたこともあります。雅彦さん自身に変わつて居るところがあるのは事実ですが、それをいじめと考えるのは少し安直な気もします。」

一気にまくしたてた。浜田教頭は、大きなため息をついてギロリと音が出そうな感じでこつちを睨みつけて言つた。

「とりあえず、話を聞かないことには話にならない。放課後では遅いと思うが、もう仕方がない。そうしなさい。その後、すぐに報告するように」

「わかりました。報告、遅れてすみませんでした」

「気をつけなさい。何だつて今日はいろいろあるんだ…」

キーンコーンカーンコーン

予鈴が鳴つたので、そこで話は終わつた。次の授業は社会か…俺は教室に向かうことにした。教室までの廊下で、六年生担任の岡部先生と一緒にになり、声をかけてきた。

「大変だなあ。雅彦いじめられてたってか？」

「はい…いじめられてるっていうよりは、ちょっと避けられているといつか、浮いてるというか…特別危害を与えてる訳でもないし、無視をされてる訳でもないと思うのですが…」

「そうだな。俺も雅彦とは委員会とかで一緒になつててるから、なんとなくそういう雰囲気はよくわかるな」

「ですよね…ちょっと変わつててるといつか…」

「そうだな。周りの子とうまくなじんでない様子はあるな。空回りするというか。それはそつと、さつきの話を聞いてたけど、今日の対応はまずかったな」

「そうですね。報告が遅れちゃつたのはまずかったです。でも、朝はバタバタしていたので…」

「本当なら朝電話を受けた段階ですぐに報告するべきだ。そして、授業の補欠に入つてもらい、すぐに家庭訪問をすることの方がベタ一だつたと思うぞ。保護者つてのは、電話をかけてくる段階で、かなりの学校に対する不信感を持つててる。電話がかかってきた段階で、警戒をしなきゃならないんだ。電話がかかってきた時に俺らがしなきゃならないことがあるんだが、なんだかわかるか？」

岡部先生は教頭と違つて、真っ向から否定することをしない。相談しやすい人つてこいつ感じなのだろう。子供も達からの信頼を得てていることもうなづける。

「うーん、精一杯謝ることですかね？」

俺は自分なりの答えを用意した。岡部先生と話すと、教頭と話すときよりも緊張する。教師としての資質を問われてているような気がするのだ。

答えを聞きたいところだつたが、教室についてしまつた。岡部先生は足を止めて言つた。

「謝るのはもちろんしづつだが、一番必要なことは、『すぐに動くこと』だよ。結局行動で示すしかないんだ。だからこそ、今日の放課後、しっかりと話を聞いてこなきゃならないよ」

そういうと、岡部先生は六年生の教室に入つていった。確かにそ
うだなあ…と一人納得してしまつとともに、浅はかな返答してしま
つた自分が恥ずかしくなつた。

俺は、いつになつたら、ああゆう教師になれるんだろうか？

三時間面の授業は算数だった。六年生では、分数の割り算の学習をしている。分数の割り算のやり方、分子と分母をひっくりかえしてかける、ということを知っている人間はたくさんいると思うが、その理由を説明できる人間は一握りだと思う。いつだつたか二コースで分数の割り算ができるない大学生がいるというものがあつたが、なんとなく覚えて、使わなければできなくなるのも当たり前だろう。

「じゃあ、今日の授業の課題は『分数の割り算のやり方を考えよう』だね」

黒板に板書すると、子ども達が一斉にノートに鉛筆を走らせる。このクラスの子ども達は学習意欲が高い。北海道の片田舎で進学率が高いわけでもない。家庭の教育力が高いわけでもないが、子ども達は学ぶことを楽しく思っている。それはそうなるだろう。俺自身も子どもの頃、今やっているような授業を受けることができたなら、もっと勉強していただろうなと思うほどだから。

授業の最初に課題が出される。その課題を解決するために自分で考える。算数の基本は「既習事項を生かす」ことだ。課題は今まで習つたことを使いこなせば解くことができる。RPGなんかと似ているだろうか。一つ一つ確実にできることを増やしていくことで、新しい敵を倒すことができる。

しかし、自分一人で課題を解くことができない時もある。そのためにクラスで考える。友人の力を借りる。みんなで解き明かす。そこに優越感や劣等感は生まれない。なぜなら、活躍できる人間はその都度変わるからだ。塾やドリルで予習している子もいないわけではないが、その解き方を説明したり、クラス全体でわかつてもらつたりするには人ととの関わりが必要になる。それは自分一人の予習、または塾での教え込みの学習では身につかない。「みんなができること」を目標とする授業を構築する。それが難しく、また楽しい。

そうした授業を積み重ねていくと、子ども達の学びに對しての意欲が変わる。学びが楽しくなっていく。

結局、教師の仕事とは何かと考えると、「勉強を教える」ことではなく、「学び方を教える」ことなのではないかと思うのだ。学び方を学んだ子どもはまつりつておいても勉強する。それをわかっていない教師のなんと多いことか。

さつきの金子なんかもそうだ。保護者からのクレームの電話が来ることを恐れる。当たり前だ、クレームなのだから嫌な思いをする。しかしそれは、「しつかりとしていない教師である自分を認めたくないだけ」なのだ。真に子どもの事を考えていれば、「至らないところを教えていただいた」ということになる。若いころは仕方がない。先生という名前に酔いしれて、子どもが育つも育たないも自分のやり方次第だと考える。自分の力を高めることに躍起になる。しかし、子どもがいなくては俺たちの仕事は成立しない。

そのあたりの考え方のシフトができると、金子なんかももう少し子どもの気持ちがわかるようになると思つるのだが……。じつはせよ、いじめられていくところの雅彦の事をどれだけ理解できるかが必要になるだろう。

理解できない（・・・・・）子を（・）どれ（・・）だけ（・・）理解できる（・・・）か（・）？

理解しようとするほど、雅彦のことは理解できないだろう。まつすぐない想いだけではうまくこかないことに、金子は気がつくのだろうか？一生懸命やるのとする奴なだけに楽しみではある。

「さて、そろそろ時間にしよう。いろいろ考えたと思つかう、この課題に対しても話し合おなさい」

授業は俺の言葉を必要とする」となく、子ども達だけで進められていいく。

「分数の割り算つて300÷1／2とかつて」と？

一人目の子どもが口火を切った。

「1／2に分けるって考えがおかしくなりませんか？」

「どうですか？」

「一枚のピザがあつて、それを「一人に分けたり、一人に分けたりつてできるけど、1／2人に分ける」とつてできないじゃん」

「確かにそうだ」

「だからさ、1／2に分けるって考えをやめちゃえればいいんだよ」「じゃあ割り算ではできないってこと？」

「子ども達の頭に「？」マークが浮かぶ。ここからどう動くだろうか？俺の説明を入れなければ、進まなくなるだろうか？」

俺は、スッと教室の横に掲示してあつた割り算の言葉の式の近くに動いた。割り算の言葉の式は二つある。

「全體量 ÷ 一つぶん = 一つぶん」

と書かれている。子どもの一人の顔がパアッと明るくなり、大きな声で話し始める。

「わかった！ねえねえ、割り算つて二つなかつたつけ？」

「『いくつぶん』を出すやつと『一つぶん』を出すやつだよね」

「たとえばさ、2mで300円のテープの1mぶんの値段なら、300 ÷ 2になるじゃん」

「うんうん」

「同じように1／2mで300円のテープの値段を出すなら、300 ÷ 1／2になるってこと」

「うん？あー、わかったわかったー！」

子ども達の顔がどんどん明るくなつていく。しかし、その中で一人首をかしげている子が発言した。

「えー、それなら300 × 2の方がわかりやすくない？だって、600円でしょ？」

「いや、そなんだけど。とりあえず、分数の割り算つてのはでき

るつて」とはわかつたじやん

「えー、でも、わざわざ割り算でやる」となことじやん。掛け算の方が簡単なのに」

子ども達同士の話し合ひが白熱してきたが、そこまで話が進んだところでちょいちょい時間になつた。俺は話に合ひさせてわかりやすいように板書をしただけだつた。

「じゃあ、 $300 \div 1 \div 2 = 600$ ってのはわかつたね。次の時間は、どうして $300 \div 1 \div 2 = 600$ になるのかを考えよう

子ども達は田を輝かせながら、つぶやくとうなづいてくる。この授業も楽しかつた。

「せんせー、やよつならー」

「はーい、気をつけて帰りなさい。また明日ね」と笑顔で返したものの、気分はすぐれなかつた。もつすぐ、柏木さんは電話をかけなくてはならない時間になる。保護者対応には慣れきたつもりではあるが、明らかに怒っている保護者と話すのはやはり緊張する。こじれたらそこまで。話は雪だるま式に大きくなり、手をつけられなくなる。

放課後、誰もいなくなつた教室でノートを開く。窓の外に見えるグランジでは、サッカー少年団の子ども達が集まつてきている。そろそろ少年団の活動も始まる時間だ。仕事ではなく、地域の住人として指導している少年団の指導は勤務時間である四時から始まる。早見が嬉々として指導に当たつているが、俺には理解ができない。教師としての仕事をなんだと思っているのだろう…

そこまで考えたところで、頭を振つた。現実から逃れようといろいろと他の事を考えだす。こうなつて問題がうまく解決したためしがない。今は、柏木さんに電話をかけた時のシナリオを考えるのが先だ。

開いたノートの中央に、「柏木さんに?」と大きく書いて丸で囲む。マインドマップの要領で、気づくことを書きだして線でつなげていく。

「学校には行きたくない?」

なぜ?

「いじめられているから?」

いじめとは?

「みんなと馴染めず、浮いている」

なぜ浮くのだろうか?

「話題が合わない」

なぜ話題が合わないのか？

…ここまで書いたところでふと手が止まる。なぜ、雅彦は周囲と話題が合わないのだろうか？実際に幼い雰囲気がある雅彦だが、学力は低くない。むしろ高いと言つてもいい。それなのになぜ幼いのだろうか？ここは、実際に家庭での話を聞かなければならぬ。この部分には赤線を引いた。そして、マインドマップの作成に戻る。

「学校に求める」と

何を？と考えた時に、岡部先生の言葉が脳裏に浮かぶ。

「真摯な姿勢、対応」

…いや、違う。学校に求めることは、あくまで違う。誠実な姿勢を見せれば納得する訳ではないと思う。

「雅彦が学校に来れるようになること」

これが一番求めていることだ。そのために、俺自身も含めて何ができるか考えるべきだ。

どうやつたら学校に来れるのか？

「浮かなければいい」

それは現段階では無理なようだ。

「浮いても大丈夫になればよい」

どうやつて？

「子ども同士の関わりだけではなく、教師との関わり」

それだけでいいのか？

「好きな教科ややりたいことがあればよい」

…ここまで書いて、教師の真摯な姿勢や対応がやはり必要なことに気が付いた。いじめられている、という根本的な解決はもちろんのことだが、当面まずは学校に来させるために必要なことは、教師がなんとかできる部分が大きいようだ。

整理すると、

- ？ まず、雅彦が周囲と馴染まない理由を探っていく
- ？ 当面、学校に来させるために、学校の中での楽しいことを探る。
- ？ 雅彦が学校に来た時に教師のサポートを忘れない。

こんなところだろうか。とりあえず、お母さんだけではなく雅彦本人と話をしなければどうにもならない。

ふと、窓の外を見ると、早見が大声を出しながらサッカーの指導をしていた。

「だから、そこで足を止めたらどうしようもないだろ！…てめえ一人でやつてるんじゃないんだからよ！…考えるよ！」

およそ教師とは思えないような言葉で指導に当たっている。チラホラと保護者の方から苦情も来ていると聞く。しかし、これは「先生」としてではなく、「一住民」として指導に当たっているのだから、こんな時だけ「先生」扱いされても困る、と早見は全く気にしていない様子だった。今回の雅彦の一件も、早見だったら、

「だつて、浮いちゃうのは本人の問題じゃないすか？俺が外している訳じゃないから、そんなこと言わわれても困りますよ」

とへラへラして終わらせてしまつ氣もする。そうじやないだろ！…とも思うが、うらやましいとも思つ。それくらい楽観的に考えることができれば、教師なんて楽な仕事は他にないとも思う。

俺は大きなため息をつき、教室の整理を終えた。いよいよ、柏木さんに電話をかけなくてはならない。重い足取りで職員室に向かった。

「もしもし」「ほんにちは。北星小学校の金子と申します」「はい」「えー、どうでしょ? 一日様子を見られて」「どうもこうも。家で落ち込んでいましたよ」「そうですか。そうですよね」「それで、先生の方は学校で何かしてくれたんですか?」「いえ……特に何か行動に移したという訳ではありません」「なんですって! うちの子がいじめられて学校を休んだっていうのに、何もしなかつたってこと…どうこうこと…」「いや、とりあえず、雅彦さんの様子をもう少し見てから具体的な行動に移そうかと思つていました」「それって遅すぎじゃありませんか? うちの子は、もう学校を休んでるんですよ! その間の勉強だって遅れるし。先生は責任とつてくれるんですか?」「いや、責任と言われましても……その間の学習については、僕がついて確実に教えますから」「それって、明日も学校に来なくていいくこと? ふざけないでよ! すぐになんとかしなさいよ!」「ですので、まずは雅彦さんの話を聞いたりしてみなこと…」「だから、うちの子はいじめられているって言つていいの普通でしょ! だからいじめている子を探し出して、謝らせに来るのが普通でしょ!」「誰にいじめられているっていつ話は出てきたんですか?」「そんな話はしていないけど、誰かがいじめるに決まってるんだから…多分、どうせ、あの悪ガキの加藤君とかが、みんなに声をかけていじめさせてるに決まってるわ」「そうやって雅彦さんが言つてたのですか?」「そいつで雅彦さんが言つてたのですか?」

「だから、そうじやないけど、そうに決まつてるつて言つてこりのよ！もう、あんたじやらちがあかないわ」

「すみません、とりあえず雅彦さんと話をさせてもらいませんか？」

「今、雅彦と話したつてどうせ『いじめなんてなかつたんだろ！』

つて丸め込むんでしょう？今は雅彦とは話をさせる訳にはいかないわ」

「…そう言われましても、今の現状がつかめないまま、クラスで『雅彦さんをいじめている人？』と聞いても、クラスのみんなはピンと来ないと思いますよ」

「じゃあ、どうしてうちの子は学校を休まなきやならなかつたのよ。そうやつてなんだかんだつて言い訳しながら、結局いじめの事実つてのを隠したいだけなんでしょう？」

「いや、隠したいという訳ではないのですが、実際にどうこう状況なのを本人と話をしないわけには」

「何回言わせるのよ！雅彦はいじめられているつて話をしているじゃない！本人がいじめられているつて話をしているんだから、雅彦はいじめられているのよ！それはもう、疑いない事実なのよ！」

「ですから、こつちも何度も話しているように、それを詳しく雅彦さんと話をしたいと言つてているんです。雅彦さんがどう感じているか、何を苦しく思つてているのか、その辺りを担任としては聞いてみないと、対応もできません」

「何？私が話のわからない女だつて言いたいの？」

「いえいえ、そんな話ではなくて…」

「ふざけないでちょうどいい！雅彦のいじめを解決しないで隠そつてしまだけではなく、私のことまでバカにするつていうの！そんな担任るもの、いじめが起きていても知らんぷりするのね」

「いえ、お母さんのこと悪く言つてているのではなく…」

「もういこつて言つてるじゃない！もういいわ。校長先生と変わりなさいよ」

「ですから、そうじやなくて…」

「何、校長先生に変わる氣もないの！もう本当に頭に来たわ」「い

えいえ、今すぐ変わりますよ

「もういいわ、覚悟しておきなさいよ

「あつ、ちょっと待つ…」

早見光の話2

サッカーを終えて職員室に戻ると八時近かった。七時まで活動をして、その後片づけ。うちの学校にはナイター設備がないので、夏はできる限りやっている。北国でもこの季節は七時頃までボールは見える。

片づけを終えると、迎えに来た保護者などと立ち話になる。レギュラーはどうなるか？今年のうちのメンバーはどうか？そんな話をダラダラとして学校に戻るとこの時間。この時間から、明日の準備が始まる。毎日のサイクルがこうなので、あつという間に慣れてしまつた。一人暮らしだから、気兼ねすることもなく学校に残ることができる。税金だから学校の電気がもつたいない、と金子先生に言われたこともあるが、じゃあお前がサッカー教えろよーと心中で思つた。サッカーを教えるのは、俺にとつては仕事だ。

職員室に戻ると、職員室には誰もいなかつた。いつも教頭が必ずいるのにめずらしい。ふと見ると、校長室の電気がついている。この時間に校長がいることはめずらしい。いつも開いている校長室の扉が閉まっているのも含め、何かあつたなと思つた。

職員室を眺めると、金子先生のカバンがある。金子先生は、いつも六時頃には帰る人だから、たぶんあの中にいるのは金子先生だろう。何があつたんだろう？

畠中とかなら何があつたのは想像できる。でも、トラブルなんかさうな金子先生が何をやらかしたんだろう？ま、けどちょっと笑える。ざまあ、つて感じだ。いつもいつも、上から田線で偉そうなこと言つているからな。でも、大したことないじゃん。

冷蔵庫からお茶を取り出し、「クククと飲み干しているといひで校長室の扉が開いた。

明らかに青白い顔をした金子先生、逆に真っ赤な顔をした教頭、そしていつもと変わらない校長が出てきた。教頭に毎日と同じよう

に報告をする。報告をしなかつただけで怒鳴られたことがある。ついでに何があつたか聞いてみよう。

「あ、少年団終わりました。つてか、なんかあつたんすか？金子先生が何かやらかしちやつたとか？」

金子先生は、青白い顔をより青くした感じで口を開いた。ちょっと涙目になつてゐところが笑える。

「いやさ、クラスでいじめだつて電話が来て。柏木雅彦、今日学校休んだんだ。お母さんとの電話で、ちょっとね」

睨みつける教頭を横目に、校長がフォローを入れた。

「いや、ちょっとした誤解なんですよ。金子先生ともこれからどうしていこうか相談もしましたし。なんとかなりますよ

「そうでしょうか？電話の様子を聞いてたら、柏木さん、委員会にも言いかねませんよ」

教頭が口をどがらせながら言つた。どうやら、結構大変なことになつてゐるらしい。ま、どちらにしても俺にはそんなに関係ないことだ。

「いやー、金子先生、大変つすねー。どうすか？一杯飲みにでもいつとりますか？パートと」

「いや、悪いけど…明日の準備もできてないから、今日は帰るわ。

「ごめんね」

と金子先生は、うなだれながら言つた。大きな黒縁メガネに長髪のパーマ、うなだれるとちょっとした妖怪のよつに見える。やつぱり笑える。

「そうすか、んじや、元気出してくださいね」

と軽く言つておぐが、正直言つともつともつとでかいことになるといいなと思つてゐる。だつて、教育委員会とか絡んでもつとでかい話になつたら楽しそうじやん。

教師になつて二年ちょっとだけ、学んだことがあると思つ。それは、「頑張りすぎないこと」だ。教師つて言つたつて、ただの人間だし。昨日まで大学生だった人間を、子供だけじゃなく、大人も

みんな、「先生！先生！」と言つてもはやす。そんな中、浮かれているところやつて、手のひらを返したように痛い目にあつんだ。俺の同期が何人も初任者のうちに辞めていった。それはみんな、「先生」という名前のプレッシャーに負けてしまつた奴らだ。自分の楽しさよりも子どもの楽しさを優先させて、先生という名前に食い殺された奴らだ。俺は、そんな風にはならない。子どもなんて、放つておいても育つっていく。俺自身がそつだつたよつた。今、ワーワーギャーギャー騒ぐ保護者達のように。

金子先生は、顔面蒼白のまま職員室を出て行つた。教頭が俺に声をかける。

「早見先生、もう少し残るかい？校長先生ともう少し話をするから、職員室出るときには一声かけてくださいね」

「わかりましたー」

校長、教頭と一人で金子先生の処分でも考えるのだろうか？それとも、対策会議なのだろうか？どちらにしても、自分のクラスで起つた問題は、結局担任が何とかするしかない。だからこそ、あきらめることが必要だと俺は思う。

金子先生は真面目だから、立ち直れるのかなあ？横で見ているには面白いけど、管理職の機嫌が悪くなつて俺にとばっちりが来るのはたまらないな。今日は帰ることにしよう。俺は、鼻歌を歌いながら机の上を片づけることにした。

やつと今日も一日が終わった。長い長い一日だったなあ……大きなため息をついて、玄関のカギを閉める。学校管理は教頭の仕事だ。毎朝六時には学校を開け、一番最後まで学校に残り、こうやって十時を過ぎてから帰ることになる。その分、一般職に比べて給料はほんの少し高いが、それに見合わない仕事量であることは確かだ。少年団の活動も含め、休日も学校を開け、学校を閉めるのも俺の仕事である。女王蜂のために働く働き蜂といったところだろうか。女王蜂はもちろん、校長であることは言つまでもない。

辺りは真っ暗である。車に乗り込み、エンジンをかけて一服する。数年前から、禁煙の流れがやってきて、学校の中はもちろん、校地内は禁煙になつた。今までは、職員室は煙草の煙でモヤがかかっていたほどだったが、今となつてはクリーンそのものである。もちろん、喫煙者にとってみては肩身の狭い想いをさせられているのだが。こうして、夜遅くならないと、車ですら吸うことができない。前に、放課後の時間に車で吸っていた同僚は、子どもにその姿を見られた。その子どもは、何の惡意もなく保護者に言つたのだが、その保護者が町の民生議員だったものだから、ひと悶着起きていた。その同僚は、次の年僻地に飛ばされていた。どこで誰が見ているかわからぬ。身から出た鎧ですぐに身を滅ぼすことになる、それが学校職だと思う。

暗い車内で大きく煙草を吸う。肺の中が煙で満たされ、頭の中がクリアになつていいくのを感じた。そして、今日一日のことを振り返る。

朝一で島中先生が辞表を提出した。校長にも入つてもらい、説得をすることで事なきを得たが、あの手の仕事ができない教員は次に何か言われたらすぐにはまた同じことをする。いわば、仕事のできない免罪符として、辞表をちらつかせるのだ。管理職にとって、退職

者を出すわけにはいかない。それは、管理のできない管理職、とうレッテルを貼られることを意味する。その先に待つのは、より僻地の学校勤務、ドサまわりが待っているのだ。

その後、金子先生のクラスのいじめ発覚。いじめそのものの有る無しよりも保護者との間に起きた摩擦の方が大きいだろう。各学年一クラスしかいない本校のような学校では、担任だけではなく先生と子ども達の関係も深くなる。管理職である俺や学校長も子ども達の顔と名前くらいは一致しているし、問題のある児童には目も届く。柏木雅彦は確かに少し周囲とは馴染んではないが、俺の見ている限りではいじめはなかつたと思う。

しかし、大々的に保護者ともめてしまつてはもう取り返しがつかない。いじめは、被害者意識が芽生えた段階でいじめとなる。いじめられている、という話を聞いた段階で、「それはいじめではない」と子どもに思い込ませることが重要なのだ。病は氣から、という言葉があるように、いじめられていると認めさせない心の強さを持たせることが必要なのだ。

保護者からの話來た段階で誠意のある行動を見せ、真摯に対応していると思われれば大きなことにはならなかつたはずだ。金子先生はその辺りの対応の仕方を間違えた。仕事ができる、と周りからチヤホヤされて自分でもそう思つていたのだろう。まさか自分のクラスからいじめられている子が出る訳ないだろう、とタカをくくつていたはずだ。その慢心が対応のミスを招いたのだと思う。

気が付くと、三本目の煙草に火をつけていた。帰るのがどんどん遅くなるが、家に待つ人もないので問題ない。家で待つていた妻と子は、仕事ばかりにかまける自分に愛想を尽かして出ていった。仕方がないとも思う。二十四時間教師で居続けなければならない仕事なのだから。教頭になる前の一般職の頃は、休みも返上して仕事をして、クラスの子どもを我が子のようにかわいがり目をかけた。保護者からの信頼も得ることができていたし、地域から、教育委員会からの評価も高かつた。そのかわりに家族からの評価は低かつた。

家の中でも教師でいってしまった。父親である前に、教師で居続けてしまった。

家族が出て行つた以上、俺は教師であり続けるしかない。養育費は払つてるので、からうじて父親としての義務は果たしていると思いたい。子どもの顔はもう久しく見ていないが、何歳になるのかも忘れた。

そこまでして俺は教師であり続ける。教師であり続ける以上は自分の考える学校を作りたい。それが今の俺の生きる糧だ。そのためには今の俺の評価を下げる訳にはいかない。金子先生には申し訳ないが、自分でなんとかしてもらしかない。盾になつてやるつもりはない。教師という仕事はそういうシビアなものだと、実感するのには高い授業料だとも思わない。

ギリギリまで吸つた煙草を灰皿に押し付けた。この間に一服すると、色々と思案にふけつてしまつ。少し反省しながら、俺はギアをドライブに入れた。

今日は全然眠れないだろう。

校長室に呼ばれ、教頭にたつぱりと絞られた。どうしてすぐに俺たちに相談しなかったんだ！クラスの子ども達に話をすることはなぜしなかったんだ！と怒鳴られ続けた。相談しようとしたが、自分でなんとかすれつて言ったんじゃないですか！と言い返したくもなつたが、そこまでの気力がなくなってしまった。言い返すこともできず、うなだれるだけだつた。あのシーンを思い返すだけで、頭をかきむしりたくなる。なぜ、俺はもっとスマートに対応することができなかつたのだろう。これでは、まるで仕事のできない教師ではないか。

このまま家に帰つても、悶々として眠れないだろう。かといって、酒に逃げるのも気に食ないので、いつものビリヤード場に車を止めた。学生時代から、暇さえあればビリヤード場に通い、練習を重ねていて。腕前はプロ級、と言いたいところだが、実は全然上手くなつていない。下手の横好き、とは昔の人もよく言つたものだ。それでも、球を突いていると頭がスッキリする気がするので通つてしまつ。この町に来る前は、もう少し都会だつたのでマンガ喫茶などにあるビリヤード台で遊ぶことも多かつた。独り身というのは、こういう時に楽だなあ、と思つ。こんな気分のまま、奥さんや子どもとの相手なんてできるわけがない。

いつも来るビリヤード場は、この「撞夢」だ。北海道の田舎にあるビリヤード場なので、スタイルシックさからはほど遠い。ずいぶん昔にあつたビリヤードブームの時の产物で、一階建てのビルの一階にはゲームセンターが入つていたがとつくなつぶれ、それ以来「テナント募集」の紙が貼られている。この撞夢も時間の問題だろう。この町に来た時から、小さなビリヤードと書かれた看板が気になつていた。赴任して一週間しないうちにドアを開けた。フロアになつていて、

は4台のビリヤード台が置かれおり、カウンターには髭面の無愛想な男が立っていた。

「ここにちは、ここ来るの初めてなんですけど、少し突かせてもらつていいですか？」

「一時間、五〇〇円」

初日の会話はそれだけだった。キューを借りて、一人でナインボールを始める。一から九までの的玉を、手玉を使って落としていく一番基本的なゲームである。ボールをセットし始めて、手入れがすさまじくしつかりとされていることに驚いた。シワ一つないラシャ（台に貼られている布）、キューは少しも曲がることなく高級感がある。タップ（キューの先についている皮）は少しもすり減つていなし、台に置かれているチヨーク（タップにつける滑り止め）は新品种同様だった。今までのマンガ喫茶に置いてあるよつなビリヤード場とは天と地の差がある。こんな片田舎の町にあるビリヤード場にしておくにはもつたいたないくらいだ。

そのギャップにやられ、こうしてちょくちょく通うようになり、寡黙なマスターとも少しずつ会話もできるようになつて行った。カバンをカウンター横の椅子に投げ、キューを受け取る。店内に客はいつものようにいない、BGMである有線のジャズが静かに鳴つていた。

いつものようにナインボールを始めた。柏木さんとの電話を思い返しながら、手玉を突く。パカーン、という音と共に九つのボールが散った。的玉は一つもポケットに入らなかつた。

それから一時間ほど没頭したものの、全く調子が出ない。やつてもやつても、球はポケットに入る事がない。好きな事のはずなのに、うまくいかないと面白くない。まさに、今の俺の仕事のようだ。ため息をつきながら、カウンターのマスターに声をかけてオレンジジュースを出してもらつ。無愛想なマスターが声をかけてきた。

「今日、どした？」

「なんか調子出ないんですね……」

「迷いがあるからだる。精神面がもうに出る」

「そんなもんですかね」

出してもらつたオレンジジュースをすすりながらカウンターに手を落とした。ここにオレンジジュースは注文するたびにオレンジを絞つて出してくれる。こだわりなのだろう。こんな田舎のビニヤード場ではありえないはずだ。

「少し一緒に突こうか？」

マスターがそんなことを言つたのは初めてだった。一緒に突いたことなんてない。

「えつ？ いいですか？」

「いいよ」

とだけ言つて、マスターはカウンターの下からキューを入れているトランクを取り出した。中からキューを出して、台に向かつた。俺は急いでオレンジジュースを飲みほした。

「ブレイクショットはお前からでいいよ」

九ボールの形に球を組んでいたマスターが振り返らずに言つた。言われるままにブレイクショットをする。一球も入らなかつたのが、少し恥ずかしい。

九ボールでは、手玉を使って番号順に的玉を落していく。的玉が入らなかつた時には突く人間が交代することになる。また、自分の番の時に的玉に触れなかつたり、手玉をポケットに入れてしまつたりしてはファウルとなる。ファウルとなつたら、相手は自分の好きな所に手玉を置いてスタートすることができるのだ。

ブレイクショットで一つも入らなかつたので、マスターの番になる。マスターは一番の的玉から軽やかにポケットに入れていく。まるで、ポケットを巣穴をしている生き物かのようにスルスルと的玉は飲み込まれていった。

九番のボールまで交代することなくマスターは突き切つてしまつた。容赦がない。少しくらい手加減してくれてもいいだろ？」……

「もう一戦行こうか」

と言いながら、マスターはボールをセットしていく。ブレイクショットはマスターからだ。

「パカーン」

といつ心地よい音とともに、一つ、二つと穴に落ちていく。合計二つの球がポケットに入った。マスターがぽつりとつぶやく。

「思い切りが大事なんだよ」

「……思い切り、ですか？」

「そう。やりたいように思い切ってやらないと」

マスターはマスターなりに、俺のことを励ましてくれているのかもしれない。無愛想なもの言い方は相変わらずだが、嫌な感じはしなかった。

「ほれ、お前の番だぞ」

五番の的玉を落とすことができなかつたので、突く順番が交代になつた。俺は、今まで少し思い切り突いた。明日、自分の正しいと思えることを思い切りやつてみようかと思えた。

五番の的玉は入らなかつたけど。

夕飯の片づけが終わり、やっと一息をつくことができた。ふと時計を見ると八時を回ったところだった。食卓にいるはずの息子に言った。

「雅彦、お風呂入っちゃになさいよ。それから宿題ね」

声をかけては見るものの返答はない。とっくにリビングから一階の部屋に移動したようだ。ここ最近いつもそう。それというのも、五年生のあの金子先生のせいだわ。あの先生がいじめを放つておいたせいで、雅彦の心が閉ざされていったんだわ。

テレビでは、内容がペラペラのバラエティ番組がやっている。雅彦も前はクイズ番組などが好きで、私の知らないようなことまで当て見せて驚かせてくれたものだつたわ。それが今や自分の部屋にこもりつきりでパソコンをいじつてばかり。夫が去年のクリスマスにパソコンを買ったことも問題だつたかも知れないわ。

一〇分待つても部屋から出てくる様子もないのに、二階に上がつてみることにした。木製のドアには木彫りのプレートで、「まさひこ」とある。三年生の頃だつたか、温泉旅行に行つた際に家族みんなで体験教室を受けた。その時に雅彦が作つたのがこのプレートだ。細かいところまでよく彫れている。一時間の教室だったが、延長延長となつて結局三時間くらいになつた。それくらい集中力のあるできる子なのだ。それなのに、それなのに……

ノックをしてみるが、反応はない。どうしてもノックする力が入り、乱暴な音になる。

「雅彦、何してるの?」

ガチャリとドアを開けると、思った通り雅彦はパソコンに向かっていた。HDDと一体になつた高かつたパソコン、「こんな高い物が本当に必要なの?」と夫には抗議したが、「どうせ買うならいいものが良いだろう。雅彦なら使いこなせるさ」と私の財布からカードを

出した。家計の中から買つのだから、自分の懐が痛む訳ではない。苦労するのは、いつも私なのだ。

イヤホンをしてるので、聞こえないのだろうか？ いつかこまづ
いている様子もない。

「雅彦、聞いているの？」

肩を掴んでこっちを向かせる。無表情な息子が「へへへ」と笑った。雅彦は表情を変えずに、

「わかつていてるよママ。僕は風呂に入ればいいんだ」

と言つて、立ち上がり部屋から出て行こうとした。その姿に感情を抑えきれなくなつて、肩を掴んだ。

「いつもいつも同じこと言わせないで！ 宿題はやつたの？」

自分でもこんなにきつい声を出せることに驚いた。

「僕は宿題はやつてないよ。学校に行かないのだから、やる必要もないよ。でも、自分で勉強はしたよ」

「自分で勉強つて……でも、いつまでも学校に行かないんじゃないの？」

「問題ないよ。ネットで見てみると、学校なんて行かなくていいやつ
ていつている人つてたくさんいるんだよ。だから、僕はあんな学校
なんてもう行かない」

目の前が真っ暗になる。「ここまで息子の心は病んでいるのかと思つ
と、涙が出そうになる。そして、ふつふつと怒りがまた湧いてきた。
「そんなこと通用するわけないじゃない！ あなたをいじめている子
たちを早くお母さんがなんとかしてあげるから、だからすぐに学校
に行けるよつにしてあげるから」

「クラスのみんながいじめつるのだから、なんとかするなんて無
理だよ、ママ」

雅彦はやはり感情を変えずに話す。どうじつこいつなつてしまつたの
だろう。

「私は……ママはね、雅彦に普通に学校に行つて楽しく過ごしてま
しこのまま

「僕は学校には行かない。じゃあ、お風呂に入るね」と雅彦は席を立つて行ってしまった。

今日の朝にも同じようなやり取りをしたわね、と大きなため息が出来る。朝、いきなり、

「ママ、僕は学校でみんなにいじめられているから、もひつ学校には行かない」「いんだ」

と宣言をされて言葉を失つた。

「誰に……、どんないじめを受けているの?」

「みんなにだよ。クラスのみんなが僕のしたい話をしてくれないんだ。僕のしたい遊びもしてくれない。みんな僕を友達にしてくれないんだ」

「クラスのみんなが…叩かれたり、お金を取られたりじゃあないのね?」

「そんなことはしないよ。だけど、もう僕はあの学校には行きたくない」

と言つ話を延々と繰り返した。学校に電話もしたけど、何か事態が変化したわけでもなく、雅彦はずつとパソコンの前に座ることになつた。ご飯の時間になると、下に降りてきて笑顔でご飯を食べる。

「僕はママの作ったご飯が大好きなんだ」

笑顔を浮かべて言つてくれるならこんなに幸せなセリフはないが、ここ最近雅彦の笑顔を見た記憶はない。無表情のまま生活をしている。抑揚のない声で言われても嬉しくはない。夕食の時に明日はなんとか学校に行ってもらいたいと話をした。雅彦の好きなハンバーグを作つて。

「雅彦、一日学校休んでどう?明日は学校に行つたら?」「お母さん、朝に僕は言つたよ。もう学校には行かない」「でも、学校に行かなかつたら困るじゃない」「何が困るの?」

「……え?学校に行かなかつたら、その後どうするの?勉強もしなくちゃならないでしょ?」「

「勉強は家でもできるよ。学校の授業なんかより、自分で勉強した方がずっと早い」

「勉強だけじゃなく、体育とか音楽とかもあるじゃない。自分一人で勉強できることだってあるでしょ。友達とも遊べないし」

「お母さん、学校でやつたことで大人になつたことは？」

「え、そ、そうね……」

「パツと思いつかないでしょ？音楽のリコーダーを吹いている大人を僕は見たことがないし、逆上がりをしてお金をもらつている人もいない。大人になつて必要な勉強つて何？買い物する時の算数なら自分で勉強できるよ」

「友達と……」

「友達はいないのも朝話したよ。だから、僕は学校に行く必要がないんだ」

「雅彦……」

「お母さん、このハンバーグおいしいね」

言葉がもう出なかつた。雅彦の中ではもう学校に行くという選択肢がないように思えた。

一人残された部屋でふと画面を見てみると、ネットの巨大掲示板が映し出されている。こんなもの見るようになつたから、雅彦の心が閉ざされていつたのよ。消そうと思つてマウスをいじつていると、ふとどんなものを見ているのか気になつた。履歴をクリックする。

「サイコパスの心理」

「世界の殺人者ランキング」

「心の闇を覆う物」

「学校なんて行かなくともいい～引きこもりからの社会人～」

「よくわかる自閉症」

「誰でもできる仕返しのやり方」

「少年犯罪法」

クリックをしながら、愕然とした。どうして私の子どもはこんな風

になってしまったの？私の育て方は間違っていた。なのに、こんな犯罪者予備軍のような子どもになるなんて……パソコンをたき割りたくなる衝動を抑えて元の画面に戻す。今はまだあんまり刺激をしない方がいいわ。

部屋からそっと出て下に降りる。階段でお風呂から出てきた雅彦とすれ違った。

「お母さん、僕はお風呂を掃除しておいたよ」

表情を変えないで雅彦はそう言った。雅彦に風呂を畳ませることができない。

「……そう

無理やり一言だけ絞り出して、キッキンに逃げ込む。ここは私の城。ここにいれば少し落着くことができる。

また、雅彦はお風呂を掃除した。毎回言つてこる。

「みんなが入るお風呂だから、勝手にお湯を捨てて掃除をしてはいけない」

と。怒鳴りつけ、時には頬をぶつこともあつたが、それでも雅彦はお風呂の掃除をやめない。しつけができるいなことなのかなしら？もつと厳しくしなくてはならないのかしら？それとも……雅彦が変なかしら？

いや、違う。やうなつたのは最近。なら、やはりいじめによるストレスが原因だわ。あの担任とクラスのいじめが元凶なのよ。なんとかしなくちや、なんとかしなくちや。やはり私がなんとかしなくちやならないわ。厳しく雅彦を叱りつけるだけじゃだめ。私は雅彦のことをわかつてあげなくちや。いじめがなくなるまで学校なんて行かなくていい。

そう思つてこると落ちついてきた。お湯を沸かして、コーヒーでリップーに豆をセットする。こつやつてコーヒーを入れている時間だけ何にも考えずに済む。私の城で私の時間を過ごす。こつしている時だけが幸せ。

ふと、思つ。これは息子と同じようなものじゃないかしら？自分

の城に籠り、自分の好きな事をする。親子って似るのかしら？

誰もいない教室で、頬をパンパンと打つ。そして、「コツシャ」と氣合を入れる。今日は入念に氣合を入れた。今日が勝負だと思つ。昨日はあの後、今日の授業の準備を入念に行つた。雅彦だけに氣をかけてはいられない。学級経営は一つのほころびから一気に崩壊する、といつ話を聞く。一人の子どもに時間をかけすぎて他の児童を放置する。それによつて、加速度的にクラスは荒れていいく。そういう状況にする訳にはいかない。

「あ、先生、おはよひじせいます」

「おはよひじせいます。晃さん、今日は学校来るの早いね。早起きでもしたの？」

「今日は日直だから早く来たんだ。今日の日直で何にしようかなあ？」

「あ、日直さんだつたんだね。今日もよろしく頼むね」

朝の心地よい会話だ。クラスの児童とは柔らかく接する。

「うん、今日は朝のスピーチでドラクエのこと話すんだ」

「そうかい、先生も昔はドラクエ好きだったんだよ」

「えー、そうなんだー！」

こういう会話を楽しいとは思わないが、こういう会話が子どもとの関係を作る。子どもの中で流行つてているアニメやゲーム、どんどんと量産されるアイドルグループなどは確実にチエックしておいていい。話が合う教師というだけで、一日置かれる。そういう努力すらしていない教師が多いので、それだけで差別化が図れるのだ。ひとりしきりドラクエについて語つていると、日直の晃が聞いてきた。

「先生、今日はお休みいるかな？」

顔が曇るのを自分でも感じた。

「どうだらう？ まだ連絡は来ていないよ。どうしたの？」

「いや、お休みいたらお見舞いカード書くからわ」

五年生ではお休みがいた時にはお見舞いカードというものを日直が書く。その日学習したこと、お見舞いメッセージなどを書いて届けるといふものだった。昨日はあたふたしていく、書かせるのを忘れていた。じついう物から突破口を作ればいいのではないか?

「もし、お休み出たら書いて頂戴ね。昨日は雅彦さんが休んだけど、昨日の日直さんは書くの忘れたみたいだね」

「貴志だからしうがないよ。先生、許してあげてね」

貴志はクラスで一番やんちゃな子だ。体は大きくて落ち着きがないから、よく周りの子とトラブルになる。しかし、根は優しい子で、飼育係の時には一生懸命お世話をするような子だった。

「いいよ。忘れるこことなんて誰もあるから」

晃との会話を切り上げ、職員室に戻る。時間は七時五〇分、まだ柏木さんからの電話はない。やはりここは先に電話をかけるべきか?それとも待つべきか?

五五分まで待つて、こなかつたらかけよう!と決心したが、やはり五五分になつても電話は来ない。かけようと思うが、やつぱり八時まで待とうかな?と気持ちが揺らぐ。電話とにらめっこしていくも仕方がないので、恐る恐る受話器に手を伸ばした。

リリリリリーン

来た!後手に回つたことを少し後悔しながら、電話に出了。

「もしもし、北星小学校の金子です」

「もしもし、あ、金子先生ですか?柏木です」

「おはようございます。今、ちょうど電話かけようと思つていたんですよ」

「そうですか。じゃあ、ちょうどよかったですね」

「ええ……で、どうですか?雅彦さんの様子は?」

「もちろん元気ないですよ。家中でしおげています。先生、今日も一日休ませよつと思つの」

「今日もですか……いじめについて何か言つていましたか?」

「クラスのみんなから避けられる、僕のことなんて誰も相手にしてくれない、って言つてゐるつて、昨日も話しましたよね」「はい。でも、誰かが率先してそういうことをしていふ感じはしないんですよ」

「その言い方だと、うちの子が元々クラスに馴染んでなかつたつていつことになりますか？四年生の春に転入してきて、それからずっと浮いてたつてことですか？」

「浮くというとあれですけど……自分から、積極的に話しかけていくタイプではありませんよね？」

「家ではそんなことないわ。参観日なんかの様子を見ていると、話しかけてないで自分一人の世界に入っている感じもなかつたわよ」「いえ、なんて言つたらしいのかな……」

「ここ最近そういうことになつてるんじゃないの！だから、あなたの学級経営とか周りの子のいじめで雅彦は学校に行けなくなつたんでしょう？もうちょっと真剣に考えてください。なんとかしてもらわなきや困ります」

「なんとかと言われましても……クラスの子には『いじめられていると言つて学校に来れないんだ』と話してもいいんですか？」

「そんな訳ないでしよう？そんなこと言つたら雅彦がかわいそうでしょう？先生、『テリカシーなさすぎですよ。だからいじめのことを気づかないとんじやないですか？』

「じゃあ、どうやっていじめている人を見つけるつていうんですか？」

「その辺りは先生が『うまくやつてくださいよーあの貴志とか言つ子とか、いつも周りの子に乱暴だつて言つ『じゃありませんか？たぶんあの子が周りにけしかけているですよ』

「せうやつて雅彦さんは言つたんですか？」

「言つてはいなけれど、たぶん絶対そうよ。雅彦がちょっと勉強できるからつて、ひがんでいじめてるんだわ。そつよ、貴志とかいう子を転校させてちょうどだい」

「そんな無理な話……」

「とにかくどうにかしてやります! それまで雅彦は学校に行けないんですからね!」

「と、とつあえず、雅彦さんって起きてますよね? 少し話をさせてもらひつことできませんか?」

「起きてますけど、話したくないって言いますよ」

「聞いてみてもらえませんか? 雅彦さんがどう思つてこるのか聞かなきや、対応もなかなかできません」

「担任なんだから、その辺のことはわかるでしょ? 問題が解決するまでは、話をさせることもできません。雅彦がかわいそうです」「いや、ですから、問題を解決するために、お母さんの口からではなく、雅彦さんの口からどういうことか知りたいんです」

「いやです。雅彦と話はさせたくないです」

「じゃ、じゃあ、今日の放課後とかお邪魔していいですか? 電話じやなくて、直接会つて話をすることができたら、よし……」

「無理です。もう、いいですから、なんとかしてくださいよ! ガチャン、ジーーー

「だめだ……柏木さんは明らかにおかしくなつている。当の雅彦はどういうことを話しているんだろう? 四年生の始めに転校してきて、話があんまり合わないとはい、クラスの中でもやつてきていたはずだ。話しかけて無視されるとかいう感じではなかつたはず。むしろ、雅彦の方が色んな人に積極的に話しかけていたようだと思つ。それに対して、貴志が何か裏でしているとは考えにくい。」

結局、雅彦とちゃんと話をしなきや事態は何も変わらないことがわかつた。ため息をつきながら、机のコーヒーに手を伸ばすと、浜田教頭と田が合つた。偶然田が合つとこつよつは、睨みつけられている感じだ。仕方がない、報告はしなくてはならない。

「教頭先生、柏木さんからの電話でした」

「見てればわかるよ。その感じだとやつぱり収穫なし所か、よつこ

じれたんじやないか？」

「……すいません。いじめをなくせ、いじめていた奴を転校させり、

家には来るな、で突っぱねられました」

肩を落としながら言つと、教頭の目がキラリと光つた気がした。

「突っぱねられたじやないんだよ！なんとかしなきゃならないだらう？」

「やうですね……とりあえず、今日は具体的に動いてみます。クラスの子にそれとなく状況を聞いたり、子どもにプリントを届けたりしてみますね」

「頼みますよ。でも、なんとか周りの子が『いじめられて不登校』

とこう事実には気づかないようにお願ひしますね」

教頭はやはり点数稼ぎに必死なのだらう。俺が自分でなんとかするしか、やはり方法はないようだ。

とりあえず、さつき名前が出ていた貴志に当たつてみる。貴志は遅刻、ギリギリで学校に来るから、中休みに話を聞くことにした。

一時間田の終了のチャイムと同時に、教室から飛び出してこきやうな貴志を手招きする。「うげえ」と絵にかいたような顔をする。呼ばれる=説教される、という図式が彼の中に出来上がっているのだろう。ま、あながち間違いではないけれど。昨日のお見舞いカードの件から切り出すことにした。

「何、先生？俺、なんか悪いことした？」

「何か怒られるようなことしたのかい？」

「いや……宿題、本当はやつてきてませんでした。すみません。明日、やつて必ず持つてきます」

苦笑いをしてしまつ。でも、ここで正直に話せるとこつことせ、やんちゃに見えてまだ子どもなんだな、と思つ。

「宿題のことじやないよ。昨日の日直のこと

「え？ 昨日の？なんかあったつけ？」

「日直の仕事、全部やつたかい？」

「やつたと思つたが……」

「お見舞いカードは書いたかい？」

「え？ 昨日お休みいたつけ？」

「雅彦さんが休んだでしょ、気づかなかつたかい？」

「ああ、そうだね。んで、給食のプリンのおかわりジャンケンで勝つたんだ。お見舞いカード、書かなかつた。すみません」

「いや、もういいんだ。でも、今回のカード、本当に書くの忘れていただけ？」

「え？ なんで？」

「なんか雅彦さんにお見舞いカードを書きたくないのかな？ って思つて。雅彦さんのこと苦手だつたりする？」

「いや、嫌いじゃないけど……」

貴志の顔が曇つた。裏でいじめているから後ろめたい気持ちがあるのでだろうか？

「けど……？」

「いや、なんかあいつ、ポケモンの話ばっかだし、こいつちが何話してもポケモンの話に持つてくから、ちょっと、なんか……」

「それで避けたり、無視したりするのかい？」

グッと一歩踏み込む。貴志は慌てて言った。

「いやいや、そういうのはないけど、ちょっと困つたりはしてた。だって、委員会の話し合いの時かにもポケモンの話ばっかりなんだよ。最近はパソコンの話になつてたつけ？ なんかスペックがどうこうとか……わかんないんだもん」

少しすねた感じで言う。いじめている、といつよりは困惑していると言つた感じかもしない。少し助け舟を出してやることにした。「いや、いじめているとかは思わないけど、あんまり仲良くないような気もしてた。どうしたんだろう？ と思つたんだ」

「仲悪くはないよ。帰る方向同じだから、一緒に帰つたりするし」

「そつか。同じ方向だもんね。じゃあ、今日の日直とお見舞いカード書いて、帰りに届けてあげてくれないかい？」

「いいよ。今日の日直は真美だつけ？」

「真美さんには声かけておくからね。みんな頼むね」

「うん」

やつぱり雅彦はちよつと浮いている。自分の好きなことの話しかしないから、周囲と馴染めていないところのは確実だ。それを嘆いて学校に来たくない、いじめだ、と言つのは果たして本当のいじめなのだろうか？

「ねえねえ、先生」

「ん？」

「雅彦って、なんで休んでるの？誰かにいじめられてんの？」

子どものカンは恐ろしい。デギマギしながら返答するしかなかった。雅彦と関わりのありそうな子にも何人か話を聞いてみたが、結局雅彦をいじめているような様子はなかつた。ただ、口をそろえてみんな、「話が合わない」ということは言つていた。周りが合わせないのだろうか？それとも雅彦が合わせてないのだろうか？どちらにしても、「いじめられている」という雅彦の真意はどこから来るのだろう？プリントは貴志に持たせることにした。

その放課後、また柏木さんから電話があつた。

「先生、ふざけないでよ！」

「え？ どうしたんですか？」

「どうしてあの貴志って子がうちに来るのよ。あの子にいじめられているのに、その子が来て雅彦が嬉しいと思つ訳ないじゃない！」

「いや、貴志さんは昨日の日直でして、そして帰る方向も一緒だといつので持たせました。話はされたんですか？」

「する訳ないじゃない！ インターホン押されても無視したわよ。雅彦の為よ。当り前じやない！」

「雅彦さんが、無視したいって言つたんですか？ 貴志さんが来たから嫌に思つたとか？」

「雅彦はあいつが来たつてこと自体知らないわよ。いじめっ子が家に来た、なんて言つとります？ どうしてあの子をよこしたの？ デリカシーって言葉知つてます？ 昨日から私の話、何にもわかつてな

いんじやないですか？」

「貴志さんとは話をしましたよ。いじめなんて全くしてないって言うことでした」

「だから彼をよこしたってこと？私がウソをついているとも言つて？そういう皮肉を込めてるの？」

「誤解ですよ。昨日の日直が彼で、お見舞いカードを書き忘れたので、今日の日直と協力して書きました。そして、貴志さんの帰り道に柏木さんの家があるので届けてもらつたんです。貴志さんは雅彦さんとよく一緒に帰るつて言つてましたよ」

「雅彦と一緒に帰るのだって、どうせいじめるためでしょう！一緒にいるからこそいじめられるつてこと、教師なのになんでわかんないのよ！」

「……他の子にもそれとなく話は聞いてみましたが、特に雅彦さんに対する何か特別なことをしているつて子はいませんでしたよ」「じゃあ、うちの子もウソをついているつて言つたのね？いじめられているつてウソをついているつてことなのね？」

「いえ、けど、なんだか話が合わないつて言つたのもこました。なんかそういう話とか言つてませんでした？」

「みんな僕の話を聞いてくれない！つて嘆いてましたよ。話が合わないつていうことじやなくて、みんなで無視しているつてことなんじやないんですか？」

「そうじやないですよ。僕が担任としてみていても不自然に外したりつてことはないです」

「だから！そういう風にするつてことは、担任も含めた学級ぐるみのいじめじやないのよ！雅彦の言つことが信じられてないつていうの？自分のクラスの子を信じられないつて言つの？」

「ですから！ですから、雅彦さんと話をさせてくださいつて言つているんです！いつでもすぐに駆けつけます。学校に来てくださいつてもいいですし、今からすぐにお邪魔しても構いません。実際に会つて話をさせてください！」

「……だめよ。そんなことになつたら、雅彦がかわいそうだもの…」

「どんなことをいじめだと思つてゐるのか？何で苦しんでいるのか？それを解き明かさないと、心が休まらないんじゃないでしょうか？」

「……ひむさいわね！わかつてゐるわよ！だから、いじめられて心が痛んでこるんでしょ？雅彦とは話はさせません！早くあの貴志つて子を転校させてください！」

ガチャン、ツーッ。

もうだめだ。俺は職員室の天井を仰いだ。完全にこじらせてしまつた。ここからどういう風に持つていけばいいか想像がつかない。完全にひねくれてしまつてこる。何を言つても堂々巡りのままだ…

：

真つ暗になつた学校を背に車に乗り込む。車は、まだ家族が多かつたころにかつたミニバンだ。一人では大きいし、燃費も悪い。そろそろ買い替えるもいいのだが、その踏ん切りがつかないのは、心のどこかに未練を感じているからだろうか。

エンジンをかけ、煙草を吹かす。一つ大きく息を吐いて、煙草に火をつけた。

金子先生の対応は遅い。仕方ないと言つてしまえばそれまでだが、不登校の電話を受けた初日は様子を見るだけで具体的な手立てを取らなかつた。夜に校長と一人で今後の対策について話をしたもの、次の日に取つた行動と言えば子どもにプリントを持たせるだけ。具体的な行動を取つていない。あれでは、解決するものもしないだろひ。

だが、こつちも具体的なアドバイスをする訳にはいかない。そんなことしてしまつては、こつちの責任になつてしまいかねない。「管理責任」と天秤にかけたとしても、下手に首を突つ込まない方がいいと思ひ。

「金子先生が単独で取つた行動なので……」

という、知らぬ存ぜぬで通せば問題ないだろひ。

いじめの話を受けてから、今日で一週間。当の柏木さんからの電話もなくなり、音信不通。金子先生はどう動いていいかわからずには手をこまねいているようだが、そろそろ何かが起きる時だろひ。

とりあえず柏木さんから直接こちら側、管理職に電話がかかつてくることは予想される。電話が来てしまつたら我々管理職も含めて対応をしていかなければならない。そうなつたら、金子先生には五年生の担任を外れてもらおう。そして、俺がクラスに入つてこの問題を解決する。そうすれば、その評価たるや相当のものだろひ。来年度の人事は一月、まだまだ時間はある。

一本目の根元ギリギリまで吸つて、灰皿に押し付ける。俺が若いころはどういう先生だつただろうか？金子先生のようにもがいて苦しんでいた時期もあつたかも知れない。しかし、昔はもう少しやりやすかつたようにも思う。保護者も先生、先生、と尊敬の眼差しで見てくれていたように思う。俺が言つたことは絶対なんだ！と家でも教えてくれていただろう。それが今となつては、学歴の高い保護者からは、「所詮、先生なんだろう」とさげすまれ、逆に学歴の低い保護者からは、「簡単な仕事で高い給料もらいやがつて、世間知らずのくせに」と妬まれる。嫌な世の中になつた。

だからこそ、俺は校長に憧れる。校長になれば、教職という職業の中では一番上に立てる。俺は偉くならなきやならない。偉くなりたい。

畠中先生はあれから辞めるとも言わなくなつた。そつちの方も、注意が必要だろう。一年生のクラスも学級崩壊状態だ。あの後にクラスを持つ人は大変だろう。

その時には、俺はこの学校にいないから、知つたことではないが。

「最近、うちの子勉強しなくなつたのよねえ……奥さんとのじみはどう？」

「うちの子もそうー全然言ひ」と聞かなくなつちやつた。困つたわ「私の家の子はもう学校の勉強だけじゃ追い付かなくなつちやつて……だから、塾に入れようかと思つてゐるの。どこかいいところないかしら？」

「駅前の塾はいって聞いたわ。あの田中さん、通わせてるつて話よ」

「田中さんつて、あの三年生の子じもじる奥さん? 三年生から塾通いなんて大変ねえ……」

「うちは少年団で忙しいから無理だわ。早見先生暇だからなんだろうけど、休みの日はずつと少年団入れてゐるの」

「ありがたい話じやない? 一生懸命やつてくれてゐるんでしょ?」

「一生懸命なのはいいけど、休んだらレギュラー外されるもの。一生懸命通つて、少年団の色々な手伝いして、やつとレギュラー取れるのよ」

「えー、そんなの大変じやない?」

「大変なんてもんじやないわよ。ここ最近は、ずっと練習試合。隣町の小学校でやるからつて言つて、送り迎えしなきやならないわけ。そういうのも休んだら、アウトだもの」

「けど、孝彦君なら多少休んでも実力でOKなんじやないの? 体も大きいし、体力もあるでしょ?」

「ダメダメ、その辺はポリシーあるのか早見先生は絶対そうするんだつて。先生がそういう訳じやないんだけば、六年生の晃君、それでレギュラー外されたらしいわよ」

「けど、それつて子どもの問題だけじやなくて、親の問題じやない。なんか納得いかないわ」

「じゃあ、また教育委員会にメールしようかしら?」

「またつて、こないだメールしたの?」

「私はしなかつたけど、この前噂でメールしたつて人の話は聞いたのよ」

「えー、誰?誰?遠藤さんとか?あの人、いつも先生の文句ばっかり言つてゐるし」

「違うのよ。うちのクラスの柏木さんつて話」

「本当?だつて、柏木さんつてあの柏木さん?なんか上品そつなお母さんじやなかつた?」「でもね、お子さんの雅彦君、最近学校言つてないらしいわよ」

「あ、なんか私も聞いた。具合が悪いつて話を金子先生はしてるけど、実はいじめがあつたんじやないか?つて、こないだ鈴木さんが言つてた」

「そうそう。それで、柏木さんと仲の良い北さんがね。だいぶ前にこのお茶会に北さん來た時あつたでしょ?あの時、教育委員会にメールする、しないの話したじやない」

「あー、したかも。なんか北さん乗り気だつたやつでしょ?」

「そうそう。それで、北さんと柏木さんが会つた時にその話したんだつて。そしたら、柏木さん乗り気になつたみたいで。インターネツトとか全然詳しくない人だつたのに、勉強して委員会にメールしたらしいわよ」

「えー、すごい!モンスターペアレントみたい!それでそれで?どうなつたの?」

「そんなんに詳しくは聞いてはいないけど、まだ何もないみたい。メールしたの聞いたのは一昨日くらいなんだけど」

「どんなメールしたのかしら?」

「なんか、『うちの子がいじめられているのに、担任は何もしてくれません。担任を早く変えてください』みたいなこと書いたらしいわよ。しかも金子先生の名前は出して、自分は匿名でやつたみたいよ」

「匿名なんだ！匿名じゃ聞かなさそうだよね。ってか、本当にモンスターじゃない？」

「うちの子、金子先生のことけっこう好きだから、変わつたら困るわあ」「

「どうなのメガネ先生？いいの？」

「なんか一生懸命はやってくれてるみたい。授業もわかりやすいって言つしね。けど、フレンドリーなタイプではないかな？」

「なんか真面目やうだもんね。インテリ系？を感じするもん。早見先生にも少し見習つてほしいわ」

「えー、早見先生の方がなんか楽しそうじゃない？」

「楽しいわ楽しいらしいけど、言葉遣いは悪いし、授業も何やってるかわからないつて、浩太は言つてたわ。宿題すら出してくれないのよ！」

「今時、宿題出さないって駄目じゃない？」

「だから、塾に行かそうとしてるのよ。もつ無理だもの」「うちの子も入れようかなあ？入れるなら一緒に入れましょうね」「もちろんよ。抜け駆けしちゃダメよ」

「あ、そろそろお開きにしない？帰つてくるわ」

「はーい。じゃあ、今日も一人三〇〇円ね」「はーい」「はーい」

今日で雅彦が学校に来なくなつて二週間が経つ。他の子達も達には具合が悪いで通しているが、さすがにもう「まかせなくなつてくる。子ども達も純真なのか、悪意があるのか、

「先生、雅彦君学校来れないのって本当に具合が悪いの?なんかお母さんが、不登校だつて言つてたよ。不登校なの?」

と面と向かつて言つてくるので、返答に困る。

「学校に来てないつてことで不登校つて言つたらそりかもしれないけど、具合が悪くて来れないつてのは本当だよ

ウソは言つていない。心の病は本当だから。

いや、心の病なのだろうか?柏木さんのお母さんとのイザコザが雅彦を学校に来れなくしているのではないのだろうか?

この二週間、プリントはおろか電話も何回もかけてきたが、二三日は電話もつながらない状態だつた。柏木さんの要求は、いじめの解決を求めている訳ではなく、「担任を替えるか、斎藤貴志を転校させる」というものになつていた。それ以外の会話は成り立たなくなつている。管理職には何度も相談しているが、平行線のままだつた。

正直なところ、電話が鳴るのが恐ろしい。電話がなると、その全てが柏木さんのように思う。そして、その電話先でこう叫ぶのだ。

「いつになつたら担任変わるのよーそれからと降りなさよ、役立たず!」

と。

授業は今のところ滞りなく行えてはいるが、今後はどうなるかわからない。自分で明らかに笑顔が減っているのがわかる。クラスの子ども達との会話も減つた。何をどうしていいのかわからない。

このクラスから降りたら、楽になるのだろうか?

過去に担任を降ろされた同僚を見てきた。その多くが授業崩壊が

引き金となる。授業が成立しないので、教務、教頭、校長などの時間を取りとどめることができる教師が教師に張り付く。張り付かれた子ども達の心は荒んでいき、担任の心はより荒む。そのうちに担任が学校に来ることができなくなり、教務などがその担任の代わりに授業を行つ。そして、担任は人知れず辞めるか、勤務先を変えることになるのだ。みるみる表情が消えていく担任を見て、同情しながらも情けなく思つたものだつた。

しかし、今ならその気持ちがわかるように思う。何をどうしたら解決するのかわからないのだ。こじれにこじれた、関係の糸はほぐすことができない。いつそのこと切り捨てたともなる。切つてしまふということは、俺が担任を降りるということだが。

帰りの会を終わらせ、そそくさと教室を後にした。職員室に入ると、少し気持ちがほつとする。とりあえず今日も一日終えることができた。

できる教師が聞いて呆れる。自分の考えていた「仕事のできる教師像」はこんなはずではなかつた。保護者との対応だつて、もっとスマートに解決できるはずだつたのに。

教科書を机に置いて力もなく椅子に座つた。もう動きたくない。

「金子先生、ちょっと校長室に来て」

教頭が優しい声で言つた。優しい声はあくまで無理をして出しているのがわかつた。目は全く笑つていない。また、何かあつたんだろう。

う。

「もう、なるようになれよ」

と心中であきらめにも似た言葉をつぶやいた。自分でも、行くところまで行つてしまふんだらうなとわかつてゐる。これ以上は何があつても驚かないつもりだ。

校長室に入つて、教頭が口を開く。校長は外出中だ。

「金子先生、今、教育委員会から連絡があつて、金子学級では教師が子どもをいじめている、という匿名のメールが入つてゐるそうだ」驚かないつもりだつたが、そこまでやるのか…と驚いてしまつた。

もう、完全に相手は手段を選んでいない。

「匿名……ですか？匿名つて言つても、柏木さんしかいないですよ

ね？」

「まあ、間違いないだらうな

と教頭は、いつもの苦虫を「ゴリゴリ噛んだよ」の顔をする。

「……それで、どうなるんですか？」

「今、校長が委員会に行つて必死で食い止めている。これが、食い止めることができずに公表されたら終わりだよ。議会にでも話が行つたら、金子先生だけじゃなく、校長や俺も飛ばされることになるかもしねないな」

「そんな……そんなことになりうるんですか？」

テレビの中でしか知らなかつたようなものが、こんなにも簡単に自分に降りかかるつてくるとは思わなかつた。教頭は目を細めて続けた。「もう、金子先生だけの責任つていう訳ではないといふに来てゐるんだ。俺や校長も含めて瀬戸際なんだよ」

「たかだか三週間子どもが来なかつただけ、しかもいじめの事実はない。そんなことで、僕たちが責任を取らされるんですか？」

「そうだ」

目の前がグワーングワーン揺れています。安定した俺たち公務員の安定つて、こんなにも儚いものだつたのか？

「そこでね、金子先生、相談なんだけど」

「……はい。なんでしょう？」

「あのや、言いにくい部分でもあるんだけど。担任、降りてくれないか？」

「え？ 担任……をですか？」

「いや、今すぐとは言わないけど。このまま状況が良くならないなら、俺たち管理職が入るなりしなきやならないと思つんだ」

「そんな……」

「今まで時間はあつたし、なんとかすることもできたと思うんだ。でも、なかなか改善はされなかつた。それは俺たち管理職の責任で

もあるからだ。だからこそ、ね？」

絶句する、というのせいで、つい時に使うのだと思った。言葉が出来ない。思考もうまくまとめることができない。

浜田教頭は苦く優しい顔をしようとする。無理をしてこなすことはわかるが、教頭なりに担任を外れろというのは心苦しいのかもしれない。それでも管理職として、末端の教員の責任を取る気はなさそうだ。自然と睨みつけてしまっている自分に気づいても、もういい。「明日からは言わないさ。金子先生にも心の準備があるだらうしね。とりあえず、そういう心つもりをしておいてもらえたと思つ。ま、ショックとは思つたが、君はまだまだ若いからさ、いひついともあると思うんだ。気を落とさないで、な」

「教頭先生、俺……」

何か言葉を出さなきやならないとは思つが、具体的な言葉は出でこない。そして、ほんの少し安心している自分にも気づいてしまった。俺は、担任から外されると言われて、ホッとしている。あの子ども達に、柏木さんにもう関わらなくていいと思つて、よかつたと思つている自分が確かにそこにいた。それは、ゆるぎない事実でもあった。

「いいんだ。なんとかするからな。金子先生の責任だけじゃない。こうこうことも、教員を続けていくとあるさ。気にしないでいいからね。それじゃあ詳しいことは明日にでも話をするから。保護者説明会なんかも開かなきやならないしね」

浜田教頭は、話を切り上げてしまった。それじゃあ、と黙つて校長室から出していくので、俺もその後についていく。自分の席に座つてからも、しばらくは動けなかつた。何をどうしたらいのだろうか？わからなくなってきた。

果然自失な俺に気づいたのか、目の前の岡部先生が声をかけてきた。

「金子先生、大丈夫かい？教頭からはどんな話だったの？」

「いや、ちょっと……大丈夫です」

となんとか虚勢を張る。自分でもわかっているけど、情けない。

「大丈夫じゃなさそうな顔をしているけどね。話してみることで、フツと楽になることつてあるよ。柏木さんの話かい？」

岡部先生はにっこりと笑いながら話してきた。子ども達もこうこう感じで接せられたら嬉しいだろうな。

「そうです。なんかもう行くところまで行っちゃって……教育委員会にメールとかも届いて。このままなら管理職も責任取れないって『管理職飛び越えて委員会かあ……今の保護者は容赦ないなあ。しつかりと手順踏まなきゃダメだろ』」「腕組みをしながら岡部先生は続ける。

「いや、僕も昔保護者とやりあつたこともあつてね。けど、昔の保護者はしつかりと順番を追つて行つてくれたんだ。まず担任である自分に話が合つて、それでも解決できなきや管理職、それでもダメなときは委員会に話が行く。そこまで僕は行つたことはないけど、その手順をしつかりと踏んでくれるなら、委員会に行くまでにけつこう話は解決するもんさ。でも、最近なら、担任すら通り越して委員会に行くから話がこじれる。保護者の方も、真剣になんとかする気がないんだな」

と一息で言つと、岡部先生は大きく息を吐いた。昔、何か嫌なことでもあつたのだろうか？とりあえず教頭に言われたことを相談してみたが、話してもいいものだろうか？教頭は学校の見回りに行つて職員室にはいながら大丈夫だろうか？迷つていると、

「少し場所を変えて話した方がいいかな？仕事は落ち着いているかい？少し気分転換でもしにいかないか？」

と言つてくれた。こうこう細かな気遣いができるから子ども達の信

頼を得ることができるのだろうか？

誘われるまま岡部先生の車に乗りこんだ。岡部先生の車は、VWのビートル。丸いフォルムが独特の雰囲気を持つている。堅実な性格の岡部先生がどうしてこんな車を選ぶのか不思議だつたので、何気なく聞いてみる。

「岡部先生は、どうしてビートルに乗つているんですか？お子さんいますよね？」

アツハツハと声をあげて笑いながら岡部先生は答える。

「その通りさ。うちの奥さんなんかはすつごい怒つているんだ。こんな使いにくい車に乗らないでちょうどいい！つて。でも、僕はここだけは譲れない。この形が好きなんだ」

なんだか意外な感じがした。岡部先生は、常に子ども達について考えている先生らしい先生だと思っていたのだが。

「この車に乗つている時だけは自分の時間だからね。ここだけは譲れない。家庭の事も、クラスの事も、ぜーんぶ忘れることができるからね」

「なんか意外です。クラスの事とか常にいろいろ考えているんだと思つていました」

「常に仕事の事を考えてちや疲れちやうよ。フツと力を抜くことができるから、力を入れることもできると思うなあ

「そうゆうもんですかね？」

「そうだと思う。柔よく剛を制すとは、昔の人も言つたもんだ。でも、剛よく柔を断つ、ともいうからね。どっちなんだ！つて突つ込みたくなるよね

「へえ、僕、その言葉知らなかつたです」

「勉強が足りないなあ、若者よ」

と言つて岡部先生は一ヤリとした。心地よい会話だつた。さつきまで柏木さんや教頭とのやり取りでピンと張つた神経が、だんだんと解きほぐされているのがわかる。

しばらく、他愛のない会話をしていると車が止まる。

「さて、着いたよ」

「つて、ここ、撞夢じゃないですか？」

「あれ？ 知ってるの？」

「知ってるも何も、僕、よくここに来ますもん。学校からの帰り、突きに来るんですよ」

と少し興奮気味に話す俺の姿に、岡部先生はちょっと驚いたようだつた。

「そうなんだ。俺も昔から突きに来てたけど、会わないもんだね。あ、そつか。最近は、俺、休みの日の昼間に来るようになつたんだ。金子先生は、学校帰りの夜に来るんでしょ？だから、会わなかつたんだね」

「あ、そつか。え？ 昔からつて、いつくらいから来ているんですか？」

「そうだなあ、今の学校に赴任してからだから、もう結構経つよ。当時はまだ独身で、金子先生みたいに夜遅くまで学校に残つて仕事をしていたもんや。まあ、いいや。とりあえず突きに行こう」
と言つて車から出る岡部先生に続き、俺も車から出る。外車は国産の車より、ドアを閉めた時の重さが違う。ドスッと音を立てて、ビートルの扉が閉まつた。岡部先生と歩きながら話す。

「いやあ、懐かしいなあ。同僚と一緒に来ることも久しぶりだもんなあ」

「昔、ビリヤードやる人いたんですけど？」

「うん。それこそ、今の金子先生みたいに初めは先輩に連れてきてもらつたんだ。そこで、面白さをしつたのがきっかけかな？大磯先生知つてる？五年前かな？六年前かな？それくらいまで、うちの学校にいたんだけど」

「知つてるも何も、有名じゃないですか！北星小学校に大磯あり！つて言われていますよ。詳しくは知らないけど、めちゃくちゃ力があつて、バリバリだつたつて話聞いてます」

大磯先生の名前を知らない教員はモグリだ、と聞かされたことがあ

る。子どもからも保護者からも絶大な信頼を得た先生だ。実践が新聞に取り上げられたり、テレビに出たりもしていたほどの先生らしい。

「大磯先生もビリヤード好きでね。たまに、学校帰りに突いていかないか? つて誘われたりしたんだ。当時は、大磯先生も子どもがいて夜は早く帰りたかっただろうけど、たまに誘つてくれてたなあと岡部先生は懐かしそうに話した。

一階まで階段を上がり、扉を開けるといつものようにマスターが無愛想な顔をしていた。

「マスター、久しぶりに夜に來たよ」

マスターは無言でうなずいた。誰に対してもそつけない態度だとわから、ちょっとほつとした。俺にだけ冷たいのかとも思っていたからだ。

「奥借りるよ」

と言つて、岡部先生は千円札をマスターに渡す。

「いやいや、ちょっと待つてください。五百円払います」

と急いで財布を出しながら言つ。キューを選びに入つていた岡部先生は、振り返ることもなく言つた。

「じゃあ、そろそろ本題に入ろうつか」

声のトーンが変わり、一瞬にして空気が張りつめたような気がした。俺は、なんだか知らないけど「ゴクリ」と生唾を飲んでしまつた。

あんまり更新しないのもあれなので…（笑）

短いけど、少しだけ更新します。

パカーン

音を立てて岡部先生はブレイクショットを決めた。9ボールを始めて、岡部先生がブレイクショットを決めたのだった。

ビリヤード場についてすぐにブレイクショットをどちらがするかを決めた。決め方は、二人同じ場所から球を撞き、ワンバウンドさせてどちらが手前の壁に近いかで決める。「バンкиング」という決め方だ。岡部先生の方が近かつたので、俺は「ラック」と呼ばれるひし形の木製の枠で、決められている通りに9ボールの形にボールをセットした。

一番、四番の球がポケットに入る。キューの先に滑り止めのチヨークをつけながら、岡部先生は聞いてきた。

「なるほど、大体の内容はわかつた。じゃあ、一つ質問、そもそもなんで雅彦が学校に行きたくないと言つたのか？その理由はわかつてはいるのかな？」

始めから確信のついた質問だった。その答えはまだ出でていない。悔しいが、正直に話す他なかつた。

「それが、実際にはわからないんです。柏木さんが言つよつて、いじめられているという雰囲気もなかつたし、学校がそんなに楽しくない、という感じでもなかつた。強いて言えば、若干友達の中から浮いてはいたようですが」

「ふーん」

岡部先生は、自分で質問しながらして興味もなさそうに一番の球を狙い始めた。

「結果には必ず原因がある」

パカーン、カン、ゴトン。一番の的玉がポケットに落ちる。二番の球を狙うには少々キツイ場所に手玉が移動した。まっすぐに打つてはどうやっても的玉に当たりそうにない。

「例えば、今、まっすぐに打つてはどつやつても的玉に当たらない結果になつた。それはなぜかわかるかい？」

「その前のショットが原因だと思いますが」

「それも一つの原因だよ。一番を落とした時に、手玉が次に狙いやすい場所に行かせられなかつたからね。でも、それが原因ではない「え、だつて、今の時にこの辺に手玉が行つていれば次の三番をすぐ狙えたつことですよね」

俺は、自分の持つていたキューで指し示しながら言つた。

「もちろんそうさ。俺がさつきのショットで上手に狙えたらよかつたんだ。だから俺のせい。でもね、その前のブレイクショットもダメだつたんだよ」

「それはないですよ。二つの球が入つたじやないですか。ミスショットなら、一つも入らないですよね」

「でも、そのせいで今の状況を起こしているんだよ。もつと言えば、さつきラックを組んだ君のせいであるとも言える」

「そりや、いくらなんでもいじつけじゃないですか？」

「そういう見方もあるつてことさ。柏木さんが君に強く当たるのがなぜか、深く考えたことがあるかい？」

「そう言われても。雅彦がいじめられているから、僕になんとかしろつて言つているのだと思つています」

「だけど、いじめられてはいない？」

「はい。そう思えるのですが」

話をしていると、マスターがオレンジジュースを一つ持つてきた。相変わらず、注文を受けてから絞つていてるのだらつ。量が少ない割に、ちょっと高い。

サイドテーブルにオレンジジュースを置いたマスターは、岡部先生に話しかけた。

「デジヤヴかな？」これによく似た光景を見たことがあるよつて思ひたつたんだが

岡部先生が苦笑いしながら答える。

「やめてくださいよ。もつ何年前ですかねえ。大磯先生も元気ですかね？」

二人には一人の過去があるようだけど、俺にはそれよりも岡部先生の言わんとしていることを、もう少し聞きたかった。話を遮るようにして、声を出す。

「岡部先生、さつきの話。柏木さんが強く当たるのは、雅彦がいじめられているからじゃないんですか？」

「うん、いじめられてはいないんじゃないよ？」

「…はい。と、思うのですが」

よくわからず黙つてしまつた俺を横目に、マスターが言う。
「自分で考えなよ。誰かに言われて出た答えってのは、身につかないもんだ。岡部さんだって、そつだつただろ？」

「だから、昔の話はやめてくださいよ」

静止する岡部先生を無視してマスターは続けた。

「この岡部さんだつて、前に大磯さんと一緒に球を撞きに来たもんだ。『学級がうまくいかない』『保護者からのクレームに耐えられそうにない』って、涙を流してたもんさ」

岡部先生は止めることができないと察したのか、照れ笑いを浮かべて、「撞かないなら、一人でやつちやうよ」と言つて、キューを構えて9ボールの続きを一人で始めてしまつた。

「岡部先生も、悩むことがあつたんですね。今の様子を見ていたら、そんな悩みなんてなくて、若いころからバリバリと仕事のできる人なんだと思ってました」

「初めからそんな奴なんていないだろ。当たり前のことだけど、そんなこともわからないのかい？そりや、さつきの話もわかんないよね」はつきり言われてしまつては、さすが心苦しい。ちょっと半べそをかいてしまう。

「今の若い先生つて、何か、人間的に幼いところが多いよなあ。わかつてないつていうか、表面的つて言つたか。若いから仕方ないつて言つてしまえばそれまでなんだけどな」

ぐうの音も出ない。」ここまで辛辣に言わると、反論もできない。

マスターは寡黙なイメージがあつたけど、ずいぶんと饒舌にしゃべるのだな。よっぽど若い先生が嫌いなのかもしない。

「視点を変える、つてわかるかい？主観でしかものを見ていないから、問題を解決することができないんだよ。何で悩んでいるかわからないけどさ」

「視点？いろいろと考えていいつもりですが…」

「自分の側からしか考えていないんだよ。主観的に物を語るから、解決しない。どうせ保護者ともめたりしているんだろ。お互いの主観でものをしゃべるから、いつまでたつても平行線なんだよ。そして、そのうちにお互いの人格否定が始まるんだ」

確かに、僕は柏木さんことをモンスター・ペアレン特だと思い始めた。『そういう人だから仕方がない』という言葉に括り付けて。『相手の気持ちを考えることができないんだよ。子ども相手だろうが、大人相手だろうが、そんなのは関係ない。人間として相手を尊重しないから、問題を解決できない』

黙々と球を撞いていた岡部先生が話に入ってきた。

「その辺りにしておいてあげてくださいよ、マスター。なんか、昔の俺を見ているようで、ちょっと心苦しいです」

笑いながら助け舟を出してくれた。

「岡部さんもそうだったよなあ。大磯さんと俺に説教されて、泣いてたつけ？」

意地悪く笑いながらマスターは続ける。

「だつて、だつて！つて繰り返してたつけ？それが今や、後輩に指導する立場なんだから、偉くなつたもんだ」

「それだけマスターも年を食つたんですよ。さつきから聞いてたら、ずいぶんキツク当たるじゃないですか？勘弁してあげてくださいよ。『ちんたら言つたつてわからない時もあるだろ？』。どうせ、岡部さんは優しく諭すんだろ。俺が嫌われ役になつてやろうかと思つてさ。昔は、大磯さんが嫌われ役で俺が助けてやつたもんだつたけど

な

と、そこまで話してマスターはカウンターに戻つていった。

「さて、結局、一人でやつちやつたよ」

全ての球を落とし、新たにラックを組みながら岡部先生が話す。

「マスターの言つとおりだと思うよ。雅彦がいじめられているのか、いないのか、その事だけに目がいっているうちは、この話は解決しない」

「じゃあ、何をすればいいんですか？ まともに柏木さんと話すことができないし…」

「それは、金子先生の考えでしょ？ 視点を変えなよ。どうしてまともに話ができないのか？ どうやつたらまともに話ができるのか？ そして、柏木さんがクレームをつけてくるのはなぜか？」

ラックを組み終えた岡部先生は、笑いながら、「もう一ゲームしようか？ 少しストレス発散をしよう」と言つた。

それからは、他愛もない話をして過ごした。岡部先生もこれ以上何かを言つてもだめだと思ったのかもしない。それくらい俺は落ち込んでいたようだ。

ちなみに、9ボールを計3回行つたが、全て俺が勝つてしまつた。帰り際に、岡部先生が落ち込んでしまつたことは言つまでもない。店を出るときにマスターが一言だけ声をかけてきた。

「時間が解決してくれると思うなよ。自分で解決するしかないんだ」

その通りだと思う。この少しの時間で、俺は何かを感じ取つていた。それを言葉でまとめるのは、今はまだできないけど、何かが変わる、いや、変えることができるかも知れない、と思い始めていた。

「もしもし。私、北星小学校の金子と申します」

「何でしじょうか？貴志つて子が転校する手はずでも整いましたか？」

「いえ、そこまでは話が進んでおりません」

「なら、話すことはありません」

ガチャリ…ツーツー

やはり、電話では埒があかない。これまでと同じ方法では、話をすることがすらできないのだ。放課後、忙しない職員室で俺は受話器を握りしめていた。岡部先生と、ビリヤードに行つた次の日、授業が終わつて意を決して電話をかけてみたのだが、結果は変わらなかつた。浜田教頭がこつちを睨みつける。

「金子先生、どうですか？」

「ダメです。もう話は聞いてもらえないようですね。もう、じじれすぎてしまつて…」

「いえ、柏木さんとの話ではなく、先日話した件です」
口ぶりはとても柔らかいが、他の先生方もいる職員室で話す内容ではない。みんなの前で話をするということは、もう管理職の中では決定事項なのだろう。全く田の笑つていらない浜田教頭は、話を続ける。

「もうそろそろ、いいでしよう。金子先生はまだ若い。今回も良くな頑張りましたが、運が悪かったということですよ」

唇の端が少し上がる。田は笑つていながら、今までのように震むようないでなかつた。そのかわりに憐れみが含まれている。

周囲の先生方は、何事もなかつたように仕事はしているが、ピンと空気が張りつめていることは感じじる。自分のクラスで子どもに説教をする時の空気に良く似ている。なんとなくそんなことを感じた。ここで、涙を流しながら、「すみませんでした」と言えば楽になれるのだろう。来年度の人事も考慮してくれるだろう。幸いなこと

に、柏木さんの他の保護者からのクレームはない。話を知らない新一年生の担任なんかに配置してくれれば、何事もなかつたように暮らせるかもしない。」の躊躇を糧にして今後を生きていくのも悪くないかも知れない。

だが、そうしないことは心に決めていた。

「…浜田教頭。明日まで待つてもらつていいですか?」

「明日でも明後日でもいいよ。だけど、決断を早くすることができれば、金子先生も楽になれるだろう? 柏木さんのことは置いておいて、他の子のためにあと半年頑張つてくれればいいのだから」

「わかりました。確かに現状のままでは、他の子にも悪いですし、教材研究なんかにも力が入りません。ケリ、つけてきます」「ん? ケリ? ケリってなんのことだ?」

浜田教頭が怪訝そうに聞いてくるが、もう知ったことではない。今日で勝負を決める。今日でダメならあきらめる。それは、もう決めたことだった。

「ちょっと、家庭訪問に行つてきます。何時になるかわからないので、そのまま帰ります。それでは、失礼します」

思つた以上に大きな声を出してしまつた。自分の狼狽ぶりがよくわかる。言葉にしてしまつたらもう後戻りはできない。周囲の先生も、果然とこっちを見ている。浜田教頭は、一瞬啞然としたが、すぐに真つ赤な顔で叫んだ。

「ちょっと待て、家庭訪問つて柏木さんの家か? これ以上こじらせるのはやめる。話がつかなかつたら、誰が責任を取るのだ? 君は今年一年で終わりだけど、君の次に持つ先生が尻拭いをすることになるんだぞ!」

一瞬で怒りが沸点に達したのだろう。「今年一年で終わりだ」と大きな声で叫んだことを気にする様子もなかつた。これ以上話をしては、気持ちが萎えてしまうと思つた俺は、すぐに職員室を抜け出した。

「すいません、もう決めたことなので。それでは行つてきます」

「おい！待て！」

と教頭の声を背中に受けながら、俺は学校を出て柏木さんの家に向かつた。

柏木さんの旦那は一般的にＳＥと呼ばれる仕事らしい。色々企業のプログラムの調整を行つてゐる。何か不具合が起きたら電話一本で、朝でも夜でもどんな時でも駆けつけなくてはならないらしい。もちろん雅彦とも関わる時間は少ないだろう。

比較的小さな一戸建ての家だった。外壁が薄いベージュで屋根は紺、小さいながらも庭があり、手入れの行き届いている辺りが家の人の性格が出ている。たぶんA型だろうな、となんとなく思った。ピンポンとインターフォンを押す。しかし、反応はない。自転車が庭にあつたので、外出はしていないのだろう。だとすれば、インターフォンで俺が来ているのがわかつているのだろう。雅彦が学校に来なくなつて、一ヶ月ほど経つ。その間、クラスメイトが入れ代わり立ち代わり手紙を届けに来ていた。それを迷惑に思い、「もう子どもをよこすな！」という電話もあつたことを思い出した。門前払いをするのだろう。

もう一度、押す。しかし、当然ながら出てこない。会つて話をしないことにはどうしようもならない。緊張でカラカラにのどが渴くが、つばを飲み込んでもう一度押す。そして、もう一度。

何度も何度も押したものの柏木さんは出てこない。ここまでしていふのに…と怒りを覚えるが、逆に、「なぜここまでしても話をしたがらないのだろう？」とも思った。話をしたら都合が悪いのではないか？それはなぜだ？と心をよぎるが、ここまで来てしまつてはもう後戻りはできない。

仕方なく、ドアに手をかける。予想に反し、カチャリと音を立てて扉は開いた。意を決して、中に入る。

「すみません。北星小の金子です。柏木さん！いませんか？」遠慮がちに声を出しが、中から出でくる様子はなかつた。

「すみません！柏木さん！」

大きな声を出す。整理された玄関には、柏木さんのものであろう靴と、雅彦のものであるうどが並んで置いてあるので、留守ではない。その時、奥の方で物音がして、柏木さんが顔を出した。明るめの色のワンピースを着ているが、髪はボサボサでくたびれた印象を受けた。この家の雰囲気に服は合っているけど、人間は合っていない。他の家人間が、この家の住人を装っているような印象を受けた。そして、案の定、顔は烈火のごとく怒っていた。俺は、なるべく刺激をしないように言葉を選びながら話す。

「すみません、勝手に入つてしまつて。でも、どうしてもお話がしたかった…」

「ふざけないで！不法侵入よ！なんて、常識がないのかしら？おかしいとは思わないの！何にもできないくせに、人の家にまで入つてどういうこと？何が話をしたいよ！笑わせないで」

一息で言い切られ、あつという間に心が折れてしまいそうになる。「すみませんでした」と言つて、ドアを開けて帰ることができたらどれだけ楽だろう。

「何とかいいなさいよ。校長に電話するだけじゃすまわないわよ。

警察に電話もしなきや」

「ちょ、ちょっと待つてください。少しだけお話をさせてください。僕も何とかしたいと思つてはいるのですが」

「何よ、都合のことばっかり言つて。そうよ、また、教育委員会にも電話しなきや…」

そこまで言つて、ハツと柏木さんは手で口を覆つた。

「教育委員会に電話されたんですね…だから、か」

予想はしていたけど、やはり先日の「担任を降りてくれ」は上からの圧力がかかっていたのだ。予想が真実だとわかつた今、俺に残さ

れている道は一つしかない。

「な、なによ！何か文句あるのー校長に言つても何も変わらないんだから、教育委員会に言つてなんとかしてもらつしかないじゃない」動搖を怒りで隠そうとして大きな声で柏木さんは叫ぶ。大声を浴びながらも、俺の心は少し落ち着いていた。この話し合いをなんとかしてやり直すことができる道と、担任を降りる道、一つしか選択肢がないならやりたいようにやつてやる。俺は大きく息を吸い込むと、真正面から柏木さんの田を見た。

「いいかげんにしてくださいー！もつと前向きになんとかするつて話にならないんですか？」

反撃を受けて柏木さんは一瞬ひるんだが、すぐに元の調子で言葉を続けた。

「前向きって何よー前向きに考えているから、あんたが担任を降りればいいって話でしょ？」

「僕が担任を降りたら、雅彦はいじめられなくなるんですか？」

「だから、あの貴志つて子も転校させなさいよ。雅彦がかわいそうだわ」

「言つていることめちゃくちゃだつてわからないんですか？雅彦のために、雅彦のために、つて言つて邪魔なものを排除して、その先に何が残るんです？」

「わかつたような口を利かないでよ。担任として何もできないくせに」

「だから、何とかしようとこうしているんでしょうーこんな不法侵入みたいなことをしないと、まともに話すらできないんですからー！それで、どうにかしのつて？笑わせるなよーあんたは、親失格だよー！」

熱くなつてきてこるのはわかつていたが、あつと思った瞬間にほ、もう遅かった。

「何で口を利くのかしら、まだまだ若いくせにーそれがあなたの正体なんでしょう？もつ話なんてないから、出でていつてちょうどだい。親

失格ですって！親になつたこともないあんたがよく言えたもんね」明らかに柏木さんの様子が変わつた。もうなりふりを構つていられない、という様子だつた。

「い、いや。口が過ぎました」

「もういいわよ。名誉棄損で訴えてやる。ふざけんじやないわよ。早く出ていけ！」

と言いながら、その辺りのものを投げつけてきた。スリッパ、靴べらなどを受け止めながらなんとかなだめようとする。

「言ひすぎました。ごめんなさい。落ち着いてください」

「謝らなくていいから、早く出ていって！」

小さめの観葉植物の鉢を投げつけられた時、さすがに体で受け止めることはできなかつたので避けた。鉢は、玄関のドアに当たつて砕け散つた。中の土が辺りに散らばり、予想だにしなかつた最悪な状況になる。

「柏木さん、すみません。なんとか落ち着いてください」

「あんたのせいよ。あんたが来なきや、こんなことにはならなかつたのよ。もういいから、帰つてよ……」

周りに投げる物がなくなり、肩で息をしていた柏木さんは落ち着くかと思つたら、今度は血相をえて掴み掛つてきた。

「もういいから出ていきなさいよ。もう、いいつて言つてこるじやない！早く出ていけ」

「ちょ、ちょと柏木さん。落ち着いて」

「早く出ていけ。もういい。あんたがここからいなくなることを私は望んでいるのよ」

無理やり玄関から押し出されそつになる。ここで外に出ていってしまつたら、カギをかけられても「おしまいだ」。ここまでこじれたなら、警察さたにもなつてしまふだらう。俺も必死だつた。

「ちょっと待つてください。柏木さん」

大声で叫ぶが、髪を振り乱しながら掴み掛る柏木さんには通じない。もうだめかも、と思つた瞬間、自分でどうしてそうしたかわから

ない中、俺は叫んでいた。

「雅彦！出でこい！お前はどう思つていいんだ！この状況を！」

柏木さんが敏感に反応する。

「やめてちょうどだい！雅彦には関係ないじゃない！いいから出でかけつて、このー！」

「雅彦！いるんだろ！出でこいー先生と話をしよう。お前はいったいどう思つているんだ？いじめられているのか？なんで学校に来ないんだ。答えるー！」

これ以上出ないつて大声で叫ぶ。すると、二階の方からストンストンと雅彦は階段を降りてきた。柏木さんが叫ぶ。

「雅彦！出でくるんじゃないつて言つたでしょー！」

その声を無視して雅彦が言つた。

「僕は自閉症だから、学校に行かないんだよ」

一瞬、時が止まったような気がした。「？」マークが音を立てて出てくるかないんじやないかつてくらい、俺はポカンとしてしまった。しかし、柏木さんの力が抜けて、へたり込んだ時に状況を理解した。

「僕は自閉症だから、学校に行かないんだよ」

同じフレーズをもう一度繰り返し、焦点の合わない目で雅彦は二つちを見た。柏木さんはへたり込んで、すすり泣き始めた。

全く予想していなかつた状況を理解した俺は、辺りを見回す。ぐちゃぐちゃになつた玄関、へたり込んで泣く柏木さん、そして自閉症の雅彦。

何を、どう始めていけばいいのだろう。泣きたくなつたのはこっちだ。

「ポポポポとドリッパーにお湯を注ぐ。「の「の子に。焦らないよう
にゆっくり、そして均一に。」コーヒー豆がブクッと膨らんで来て、
鼻の奥をくすぐる心地よい香りを放つ。感じながら、大きなため息
を一つ、意識してついた。ため息をつくと幸せが逃げるという話を
聞いたこともあるが、すっと頭の上の方が軽くなつた感じがした。
ふと時計を見ると、一〇時を少し回つたところだった。雅彦はも
う寝ている。夫は、今日も遅くなるという。遅くまで働いて来る夫
のおかげでこの家が建つた。感謝はしている。愛情を感じているか
どうか?と問われたら答えにつまることもわかっている。
今日は大変な一日だった。とうとう、あの担任に雅彦のことがバ
レてしまった。

雅彦が自分のことを自閉症と言いだして、もう一週間になるだろ
うか。朝、いつもと同じように雅彦の事を起こしに行つたら、いつ
もは布団にくるまつているはずなのに着替えをして勉強道具を準備
していた。やつと学校に行つてくれるのね!と嬉しくなつて、駆け
寄つたら地獄に突き落とされた。

「お母さん、僕は自閉症です。自閉症だからいじめられていたの
はないのです」「え?」

「僕はいじめられていたのではないのです。だから、学校に行きま
す」

「ちよ、ちよつと待つて、自閉症だつて誰が言つたの?どこでそん
な言葉?...?」

「自分で調べました」「自分で調べたつて...そんな...」

聞くと、パソコンを使って膨大な知識を得たようだつた。確かに
雅彦は子どもの頃から興味のあることの知識は膨大だつた。それは、

ゲームのキャラクターの名前を全て言える、好きな車の一部分だけ見て車種を当てる、などのような趣味の分野だけの事だったのだが。もちろん親としてその疑いがなかつたとは言わない。子どもの頃から受ける検査では、何回も「発達障害の疑い有」という判定を受けている。しかし、親としてそんなことを受け入れることはできなかつた。

それを、まさか息子の口から認める言葉が出るなんて思いもしなかつた。

なんとか息子をなだめ、学校に行かせるのは思いとどまらせた。ほとんど、納得はしていなかつたので、ほぼ無理やりだつた。自分でこうだと思つたら意思を曲げない、それは学校に行かない、と言つた時もそうだ。今度は学校に行くと言つたらテコでも動かない様子が見られた。それこそ、よく言われる自閉症特有の「こだわり」の部分なのだろう。

なんとかなだめることができた後に、絶望感に襲われた。そして、その絶望感は怒りに変わり、それは担任に向かつた。激情の中、その辺りの分析はできていた。しかし、私自身を突き動かす感情の嵐に、私は抗う術を持たなかつた。

コーヒーが落ち、それをカップに移す。椅子に座り、コーヒーを飲む。おいしい、と思わなかつた。ただ、いつも飲んでいる香りを味が、私の細胞を刺激するだけだつた。

ありもしないじめについて文句を言つているのはわかっていた。解決策が見つかる訳もないし、事態が好転する事がないこともわかつていた。ただ、現実を受け入れられない自分と、それを客観的に見ている自分がいた。行動に移る自分を止める自分に、力はなかつた。

雅彦が「自閉症」と金子先生に告白してから、先生は玄関掃除を手伝つてくれた。雅彦とは、ポケモンの話などをしていた。自閉症、という話題からは遠ざかるように。それは、彼の優しさというよりは、戸惑いだつたのだと思う。私と同じだ。

自分とは違うものを前にした時、どうしてよいかわからなくなる。理解ができないものを前にした時、今までの自分が通用しない時、自分が否定されたように感じるからだ。彼もやうやくだのう。いや、薄々は気づいたのかも知れない。

それも、どうでもよい。

底にたまつたコーヒーは、泥のような色をしている。苦々しい気持ちで、泥水をすすつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0935q/>

先に生きている

2011年11月26日16時51分発行